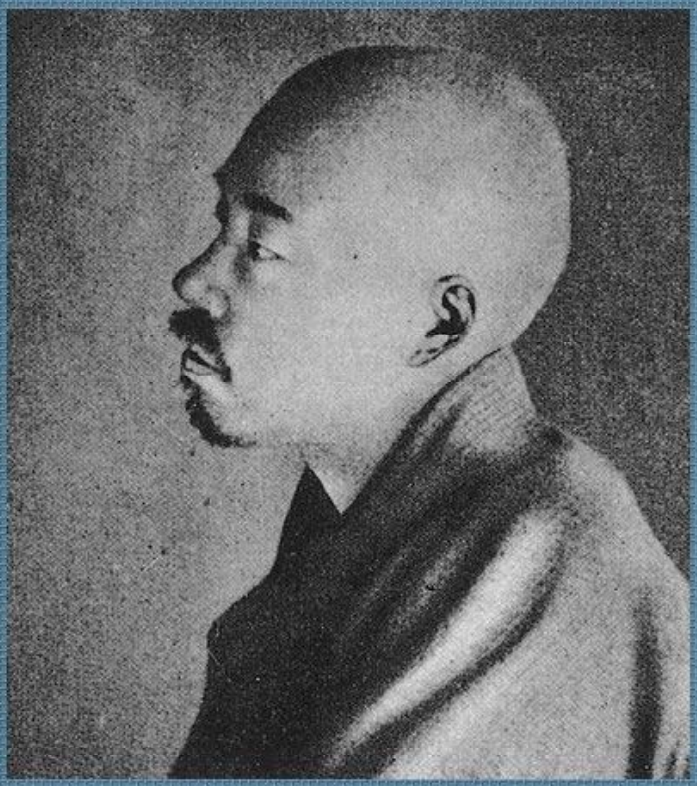
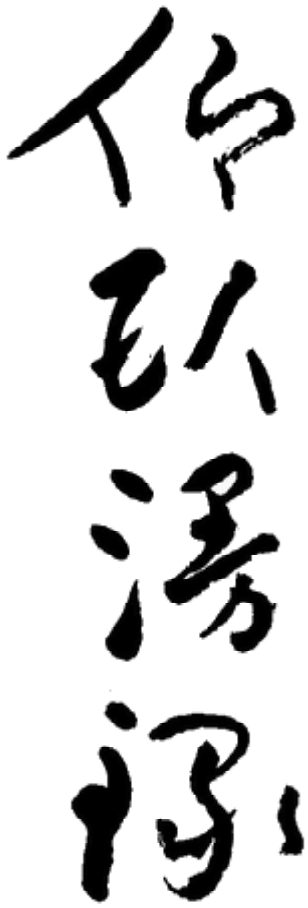
仰臥漫録



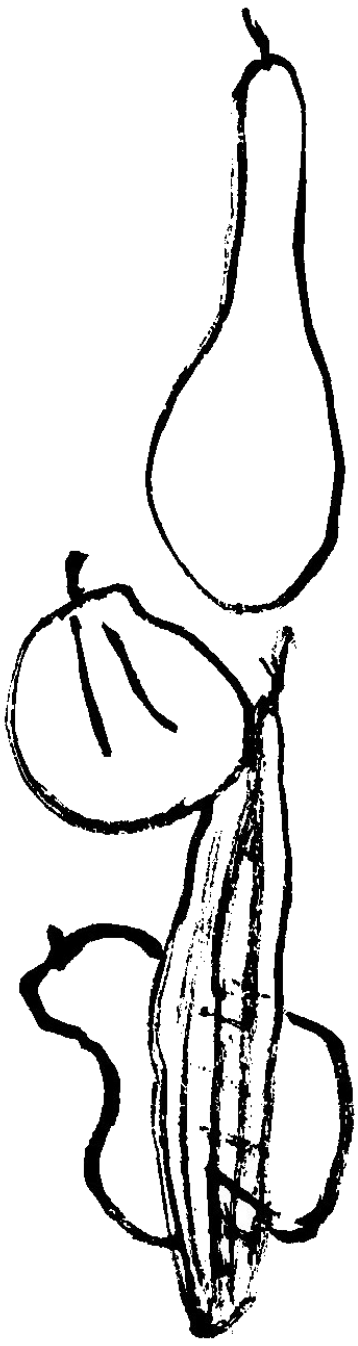
正岡子規著

表紙写真：国立国会図書館所蔵



明治卅四年九月二日　雨　蒸暑（むしあつし）

庭前の景は棚に取付（とりつい）てぶら下りたるもの
夕顔二、三本瓢（ふくべ）一、三本糸瓜（へちま）四、五本夕顔
とも瓢ともつかぬ巾着形（きんちやくがた）の者四つ五つ

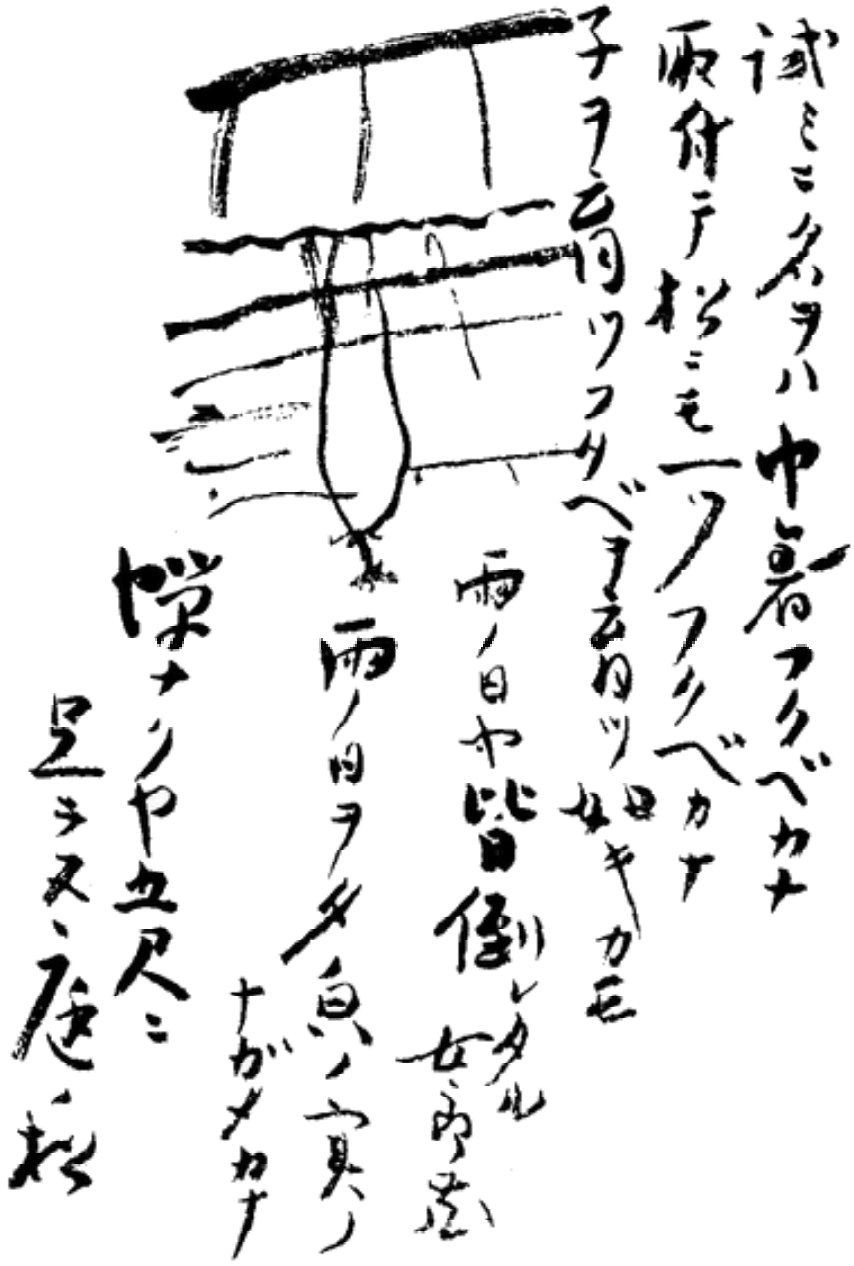


女郎花真盛雞頭尺より尺四、五寸のもの二十本許

夕顔の実をふくべとは昔かな
夕貝（ゆうがお）も糸瓜（へちま）も同し棚子（たなこ）同士（どし）
夕貝の棚に糸瓜も下りけり
鄙の宿夕貝汁を食はされし
　右八月廿六日俳談会席上作
夕顔の太り過ぎたり秋の風
棚一つ夕貝ふくべへちまなんど
　病床のながめ
棚の糸瓜思ふ処へぶら下る
試みに名をは巾着ふくべかな

取付て松にも一つふくべかな
子を育つふくべを育つ如きかも
雨の日や皆倒れたる女郎花（おみなえし）
雨の日を夕貝の実のながめかな
蟬なくや五尺に足らぬ庭の松
糸瓜ぶらり夕顔だらり秋の風
病間に糸瓜の句など作りける
野分近く夕顔の実の太り哉（かな）
湿気多く汗ばむ日なり秋の蠅（はえ）
雉頭（けいとう）のまだいとけなき野分かな

秋もはや塩煎餅（しおせんべい）に渋茶（しぶちゃ）哉



朝　粥(かゆ)四椀(わん)、はぜの佃煮(つくだに)、梅干(うめぼし)　砂糖つけ

昼　粥四椀、鰹(かつお)のさしみ一人前、南瓜(かぼちゃ)一皿、佃煮

夕　奈良茶飯(ならちゃめし)四碗、なまり節(ぶし)　煮て　少し生にても　茄子(なす)一皿

この頃食ひ過ぎて食後いつも吐きかへす

二時過(すぎ)牛乳一合ココア交(まぜ)て

煎餅菓子パンなど十個ばかり

昼飯後梨(なし)二つ

夕飯後梨一つ

服薬はクレオソート昼飯晩飯後各三粒（二号カフセル）

水薬　健胃剤

今日夕方大食のためにや例の左下腹痛くてたまらず暫(しばらく)にして屁出(へい)で筋ゆるむ

松山木屋町(きやちょう)法界寺の鰌施餓鬼(どじょうせがき)とは路端(みちばた)に鰌汁商(あきな)ふ者出るなりと　母なども幼き時祖父どのにつれられ弁当持て往(い)ててその川端にて食はれたりと　尤(もつとも)旧暦廿六日頃の闇(やみ)の夜の事なりといふ

餓鬼も食へ闇の夜中の鰌汁

午後八時腹の筋痛みてたまらず鎮痛剤を呑(の)む　薬いまだ利(き)かぬ内筋ややゆるむ

母も妹も我枕元(わがまくらもと)にて裁縫などす　三人にて松山の話

殊(こと)に長町の店家(みせや)の沿革(えんかくばなし)話いと面白かりき

十時半頃蚊帳(かや)を釣り寝(しん)につかんとす　呼吸苦しく心臓鼓動強く眠られず　煩悶(はんもん)を極む　心気(しんき)やや静まる　頭脳苦しくなる　明方(あけがた)少し眠る

九月三日　朝雨　午前十一時頃晴　その後陰晴不定

朝繃帯取換(ほうたいとりかえ)　十時頃また便通

陸(くが)氏只今帰られし由(よし)

昼前陸氏来る　天津肋骨(てんしんろっこつ)よりの土産(みやげ)

払子(ほっす)一本　俗画二枚　板画（けしき）一枚

陸氏は支那の王宮の規模の大なるに驚きたりといふ

朝　ぬく飯二椀　佃煮　梅干

牛乳五勺(しゃく)ココア交　菓子パン数個

昼　粥三椀　鰹のさしみに蠅の卵あり　それがため半分ほどくふ、晩飯(ばんめし)のさいに買置(かいおき)たるわらさをさしみにつくる　旨(うま)くなし　食はず

味噌汁一椀

煎餅三枚　氷レモン一杯呑む

夕　粥二椀　わらさ煮　旨からず

三度豆（さんどまめ）　芋（いも）二、三　鮓（すし）少し　糸蒟蒻（いとごんにやく）
総（すべ）て旨からず　佃煮にてくふ　梨一つ

陸氏内より朝鮮の写真数十枚持たせおこす

午後母は車にて芝南佐久間町の池内氏を訪ふ　政夫（まさお）氏
のくやみなり

瓢亭（ひょうてい）来る

今日は昨夜来のつづきにて何となく苦し

歯齦（はぐき）の膿（うみ）を押出すに昼夜絶えず出る　昨日も今日も同じ

町川にぼら釣（つ）る人や秋の風

九月四日　朝曇　後晴

昨夜はよく眠る

新聞『日本』『二六（にろく）』『京華（けいか）』『大阪毎日』を読む例の如（ごと）し　『海南新聞』は前日の分翌日の夕刻に届くを例とす

朝　雑炊（ぞうすい）三椀　佃煮　梅干

牛乳一合ココア入　菓子パン二個

昼　鰹のさしみ　粥三椀　みそ汁　佃煮　梨二つ

葡萄酒一杯（これは食時の例なり　前日日記にぬ

かす）

間食　芋坂団子(いもさかだんご)を買来(かいきた)らしむ（これに付悶着(もんちやく)あり）

あん付三本焼一本を食ふ　麦湯(むぎゆ)一杯

塩煎餅三枚　茶一碗

晩　粥三椀　なまり節　キヤベツのひたし物

梨一つ

午前種竹山人(しゆちくさんじん)来る　菖蒲田原釜(しようぶたはらがま)なこそなどの海水浴に游んで帰ると　原釜にては松魚(かつお)一尾八銭高きとき十三銭

家庭の快楽といふことといくらいふても分らず

物思ふ窓にぶらりと糸瓜(へちま)哉

肋骨(ろっこつ)の贈り来りし美人画は羅(うすもの)に肉の透(す)きたる処にて

裸体画の如し

裸体画の鏡に映る朝の秋

美女立てり秋海棠(しゅうかいどう)の如きかな

九月五日　雨　夕方遠雷

朝　粥三椀　佃煮　瓜(うり)の漬物(つけもの)

昼　めじのさしみ　粥四椀　焼茄子(やきなす)　梨二つ

間食　梨一つ　紅茶一杯　菓子パン数個
夕　鶏肉　卵二つ　粥三椀余　煮茄子（になす）
若和布（わかめ）二杯酢かけ

午前　陸妻君（くが）巴（ともえ）さんとおしまさんとをつれて来る　陸氏の持帰りたる朝鮮少女の服を巴さんに着せて見せんとなり　服は立派なり　日本も友禅（ゆうぜん）などやめて此（この）ようなものにしたし
芙蓉（ふよう）よりも朝顔よりもうつくしく

午后ノ徳恵巴サント オミヤサントヲツレテ来ル
従妹ノお帰リタル朝鮮少女ノ服ヲ巴サンニ着セ
テ見セントナリ服 ハ立派ナレドリボンモ友禅ナド
ヤメテモヤウナモノニ
シタシ

芝草ヨリモ
朝顔ヨリモ
ウツクシク

夕刻三吉(みよし)氏来る　明日京へ帰るとなり

夕顔と糸瓜残暑と新涼と
青厓(せいがい)と愚庵芭蕉(ぐあんばしょう)と蘇鉄(そてつ)哉

青厓今愚庵に逗留

題払子(ほつすにだいす)　肋骨のくれし払子毛の長さ三尺もあり

馬の尾に仏性(ぶっしょう)ありや秋の風

神鳴(かみなり)の鳴れとも秋の暑さかな

九月六日　晴雨不定

朝　粥三椀　佃煮 不足

昼　さしみ（かつを）粥三、四椀　みそ汁　梨

間食　今日は『週報』募集句検閲の日なればとて西瓜（すいか）を買はしむ　西洋西瓜の上等なり　一度に十五きれほどくふ

夕　粥三椀　あかえ　キャベツ　冷奴（ひややっこ）　梨一つ

便通　朝、午後、夜、三度

今日は歯の膿（うみ）おさず

夜　羊羹（ようかん）二切

肋骨より托(たく)せし荷物近衛(このえ)公の内より陸(くが)へ来り更に陸より届け来る　三尺ほどの青塗(あおぬり)の箱なり

中から出たものは

○四君子(しくんし)等の掛け物小幅六枚　地は紺にて彩色画のはでな俗なものなり

○天津人形四個　大さ八寸ばかり　蝦蟇仙人猩々寿老人等

ただ土をこねて表面を彩色したるもの、中空(ちゆうくう)になり居らざる故非常に重く多少破損(はそん)せり

○鼠二つ

○おきあげの如き俗な者十枚ほど　○団扇(うちわ)二本

午後　おいくさん、巴さん、おしまさん三人来り西洋

の廻灯籠をまはして遊ぶ　皆鰕茶の袴なり

左千夫来る　昨夜興津より来りしなりと　山北の鮎鮓

御土産に買ひ来りしが新橋着遅くかつ雨なりし故こちらへ寄らずに帰りたりと　興津行は『週報』課題松の歌を作りしに行きしなりと（今日は太白といふ八幡梨を持参）余曰くそれわろし、松といふ題已に陳腐なるに殊に陳腐なる興津に行くこと大間違ひなりそれよりも知らぬ野寺の庭の松か兄の庭の松を詠みたる方まさりたらん云〻

閑談数時晩餐（うなぎ飯）を喫し夜帰る

瓢亭陸へ行きし帰りなりとて立寄

今日熱くてたまらず昼の内より汗出で時〻ぞくぞくと寒さに冒(おか)され心地(ここち)いやなり

夜に至つて腹のはりたるためにや苦しくてたまらず煩悶す　強(し)ひて便通を試みたるに都合(つごう)よくあり　いたく疲労同時に熱発　験温器を入れて見るに卅七度七分しかなしといふ　この熱なかなか苦し

九月七日　忽(たちまち)雨　忽晴

今朝『週報』募集句の原稿を持たせ使(つかい)を出しついで

に宮本へ往て腹のはりを散らす薬をもらひ来らしむ

白い散薬をもらひ来る

朝繃帯(ほうたい)かへ便通あること例の如し

秋一室払子(ほっす)の髯(ひげ)の動きけり

秋の蠅(はえ)殺せども猶(なお)尽きぬかな

雞頭(けいとう)や今年の秋もたのもしき

夜碧梧桐(へきごどう)来る　蕪村句集講義読合(よみあわせ)のため

朝　粥三椀　佃煮　わろし　こーこ少し（茄子と瓜）

牛乳五勺ココア入　塩せんべい三枚

昼　かつをのさしみ　粥三椀　みそ汁　西瓜二切　梨

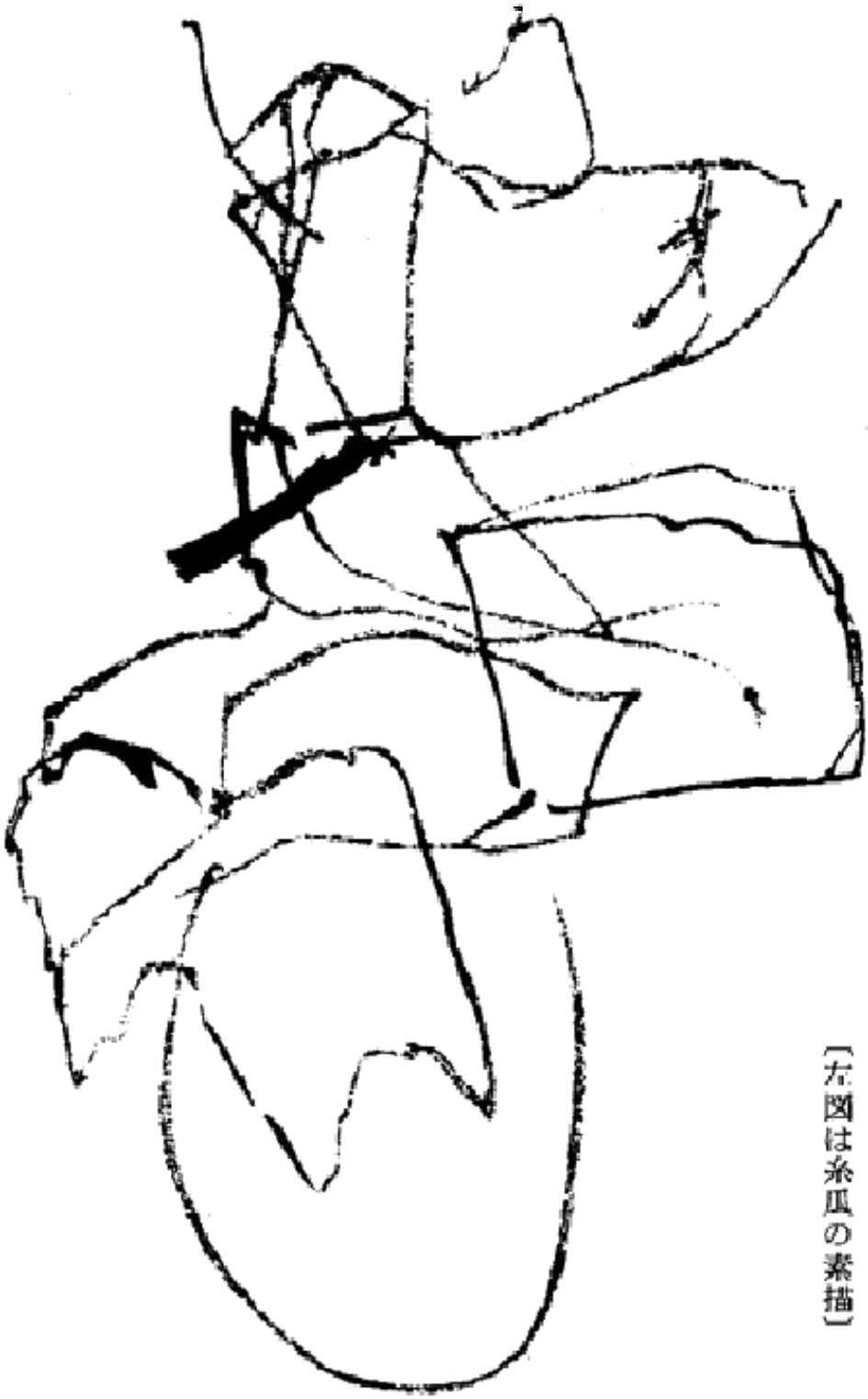
一つ

間食　菓子パン十個ばかり　塩せんべい三枚　茶一杯

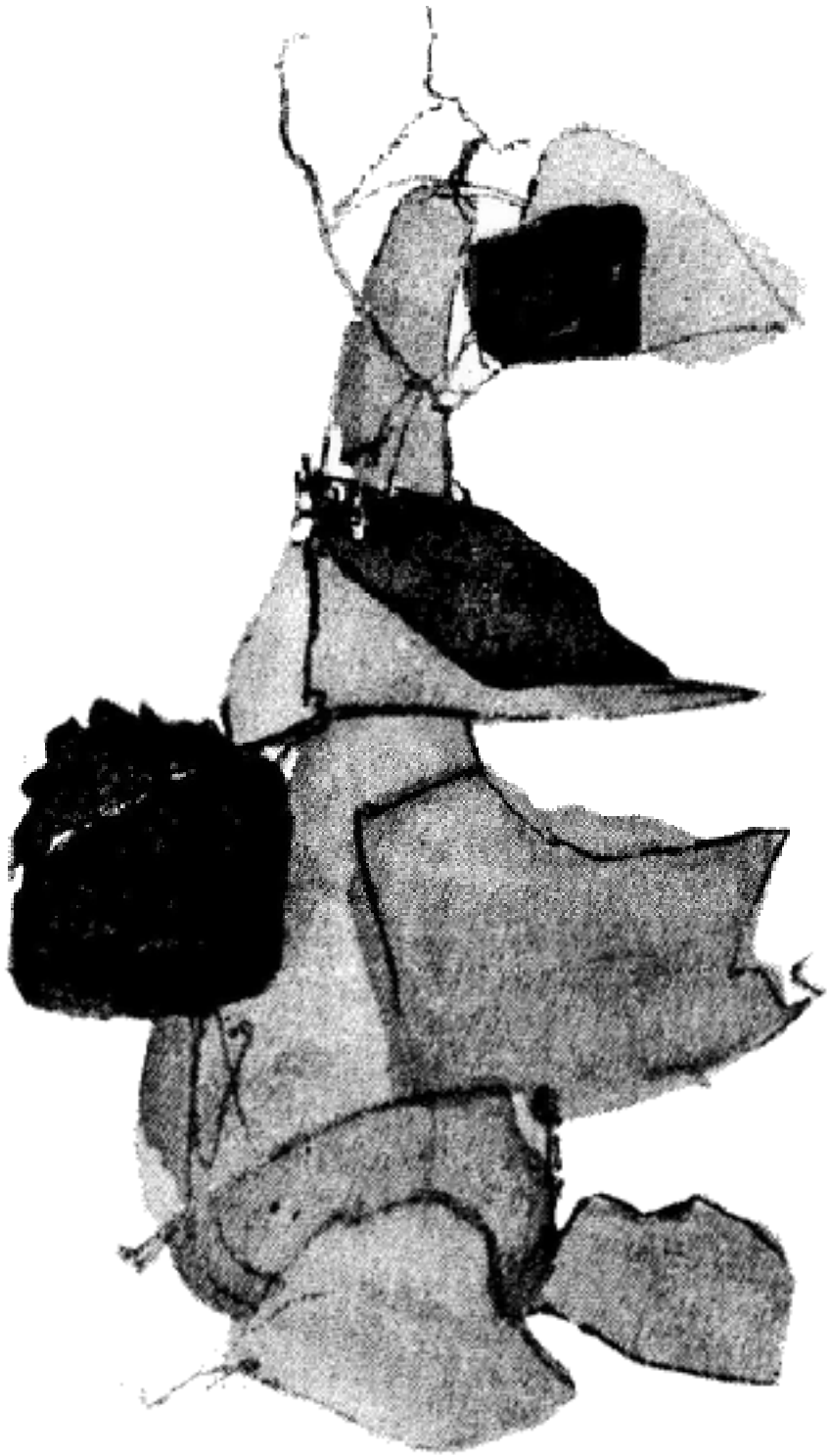
夕　栗飯三わん　さわら焼　芋煮

この夜はよく寐たる方なり

この日着物シャツ着かへ



【左図は糸瓜の素描】



〔右図は糸瓜の図〕

九月八日　晴　午後三時頃曇　暫くして又晴

朝　粥三わん　佃煮　梅干　牛乳五勺ココア入　菓子パン数個

昼　粥三わん　松魚（かつお）のさしみ　ふじ豆　つくだに　梅干　梨一つ

間食　牛乳五勺ココア入　菓子パン数個

九月八日 晴 午後三時頃曇 暫クシテ又晴

朝 粥三ワン 佃煮 梅干 牛乳五勺ココア入 菓子パン数個

昼 粥三ワン 松魚ノサシミ フジ豆 ツクダニ 梅干

梨一ツ

夕 牛乳五勺ココア入 菓子パン数個

(菓子パン数個アル時ハ多ク此数種ノパンヲ一ツ宛取リテ)

朝庭の棚を見るに糸瓜(へちま)の花八、南瓜(かぼちや)の花二

○追込籠(かご)のカナリヤ鉄網にとりついて鉄網に附着したる白毛を啄(ついば)む　○白き蝶女郎花(おみなえし)の花を吸ふ　○蝶二つになる　○ぶいぶい糸瓜の花を吸ふ　○蛾一つガラス戸を這(は)ふ　○揚羽(あげは)の蝶来る倉皇(そうこう)として去る　○鳥一羽棚の上を飛び過ぐ　○山女郎(やまじょろう)（黒蝶）来る　○雲なし

紅緑来る　午前十一時頃苦み泣く

夕顔や野分恐るる実(み)尻の太り

病間(やまいかん)あり秋の小庭の記を作る

午後理髪師来る　一分刈廿五銭やる
理髪師の言によるに夕顔に似て円(まる)き者は干瓢(かんぴょう)なりと
　干瓢の肌へうつくし朝寒み
棚に白き花二つ咲く（夕貝か瓢(ふくべ)か干瓢か分らず）
夕飯　粥二椀　焼鰯(やきいわし)十八尾　鰯の酢のもの　キヤベツ　梨一
　秋の蠅追へばまた来る叩けば死ぬ
この夜一時頃まで安眠
この日便通三度

九月九日　晴

便通及細帯

朝　栗小豆(あずき)飯三碗（新暦重陽(ちょうよう)）　佃煮

間食　紅茶一杯半（牛乳来らず）　菓子パン三個

便通あり

午(ひる)　栗飯の粥四碗　まぐろのさしみ　葱(ねぎ)の味噌(みそ)和(あえ)　白(しろ)瓜(うり)の漬物　梨一つまた一つ

氷水一杯

夕　小豆粥三碗　鰌(どじょう)鍋　昼のさしみの残り　和布(わかめ)

煮栗（にぐり）

朝両足を按摩（あんま）せしむ

長塚の使（つかい）栗を持ち来る　手紙にいふ　今年の栗は虫つきて出来わろし　俚諺（りげん）に栗わろければその年は豊作なりと　果して然（しか）り云（うんぬん）〻　栗の袋の中より将棊（しょうぎ）の駒一つ出づ

新暦重陽

栗飯や糸瓜の花の黄なるあり

主（あるじ）病む糸瓜の宿や栗の飯

栗飯の四椀と書きし日記かな

糸瓜の花一つ落つ　○茶色の小き蝶低き雞頭（けいとう）にとまる　○曇る　○追込籠のジヤガタラ雀（すずめ）いつの間にか籠をぬけて糸瓜棚松の枝など飛びめぐるを見つける　○隣家の手風琴（てふうきん）聞ゆ　○ジヤガタラ雀隣の庭の木に逃げる　家人籠（かご）の鉄網を修理す　○蟬（せみ）つくつくぼーしの声暑し　○日照る　○蜻蛉（とんぼ）一つ二つ　○揚羽、山女郎あるいは去りあるいは来る　○梨をくふ

題画美人（がびじんにだいす）　肋骨所贈

うすものの秋に勝（た）へざる姿かな
　美人の画と払子（ほっす）と並べ掛けたる
夕顔の垣根覗（のぞ）きそ美人禅

即　事

九月蟬椎伐（ぜみしいき）らばやと思ふかな
　栗出来ぬ年は五穀豊穣（饒）なりとかや
糸瓜には可も不可もなき残暑かな

〇

人問はばまだ生きて居る秋の風
牡丹(ぼたん)にも死なす瓜にも糸瓜にも
病牀のうめきに和して秋の蟬
朝顔や九月の花に耻多き
頭を扇(あお)がしむ　〇氷水に葡萄酒を入れて飲む
氷噛(か)んで毛穴に秋を覚えけり
寒暖計八十五度
病人に八十五度の残暑かな
夕刻五城(ごじょう)玄関まで来る　土産林檎(りんご)六個と煙草の灰吹(はいふき)な
り　灰吹は陶器にして布袋(ほてい)のあくびしたる処布袋の口

即(すなわち)　灰吹の口なり　これは出雲(いずも)の産なりと

点灯後寒暖計八十二度

上野の　梟(ふくろう)　少し鳴いてまた罷(や)む

秋の灯の糸瓜の尻に映りけり

病牀所見

臥して見る秋海棠(しゅうかいどう)の木末(こずえ)かな

秋海棠朝皃(あさがお)の花は飽き易き

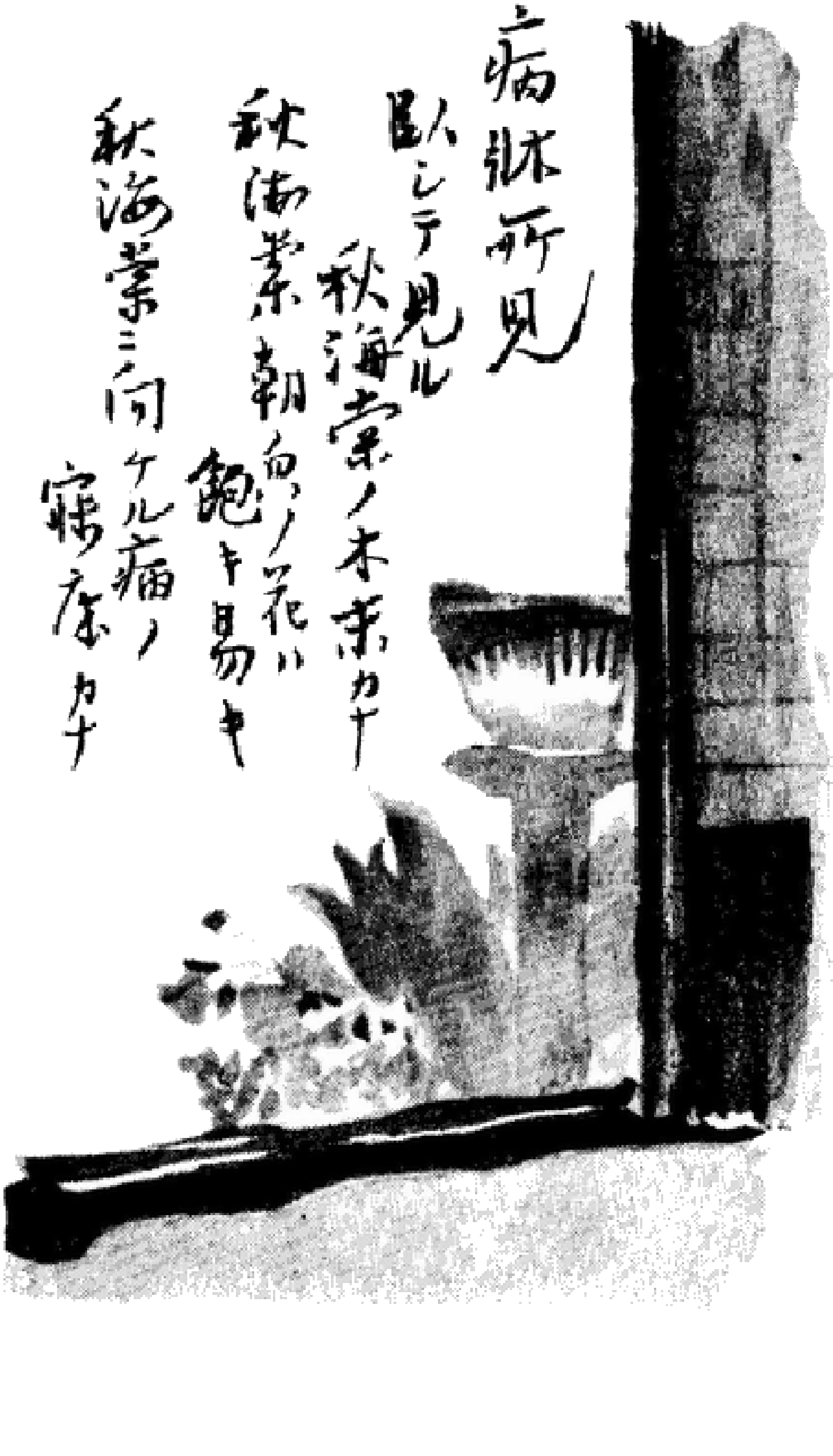
秋海棠に向ける病の麻床かな

病牀所見

臥シテ見ル秋海棠ノ木末カナ

秋海棠朝皃ノ花ハ飽キ易キ

秋海棠ニ向ケル病ノ寝床カナ



虫の声滋(しげ)し歌よみならば歌よまん
　隣家に八石(はちこく)教会と云(い)ふあり
八石の拍子木(ひょうしぎ)鳴るや虫の声
　細臑(ほそずね)の影襖(ふすま)にあり
つくづくと我影見るや虫の声

〇

こほろぎや物音絶えし台所
さまざまの虫鳴く夜となりにけり
夜更(ふ)けて米とぐ音やきりぎりす
痩臑(やせずね)に秋の蚊(か)とまる憎きかな

九月十日　薄曇　午(ひる)晴

便通間にあはず　繃帯取換

朝飯　ぬく飯二椀　佃煮　紅茶一杯　菓子パン一つ

便通

午飯　粥いも入三碗　松魚(かつお)のさしみ　みそ汁葱茄子　つくだ煮　梨二つ　林檎(りんご)一つ

間食　焼栗八、九個　ゆで栗三、四個　煎餅四、五枚　菓子パン六、七個

夕飯　いも粥三碗　おこぜ豆腐の湯あげ　おこぜ鱠（なます）

キャベツひたし物　梨二切　林檎一つ

此蛙（かわず）の置物は前日安民（やすたみ）のくれたるものにて安民自ら鋳（い）たる也

無花果（いちじく）に手足生えたと御覧（ごろう）ぜよ
蛙鳴蟬噪（あめいせんそう）彼も一時と蚯蚓（みみず）鳴く

午時（ひるどき）　ジヤガタラ雀帰りて庭にあり

鳴雪（めいせつ）翁来る　『ホトトギス』会計の上につき話あり

水飴（みずあめ）一罎（びん）を贈らる

国分みさ子女史来る　義仲寺（ぎちゆうじ）写真二枚発句刷物（ほつくすりもの）一枚を贈らる

家人追込籠を修理す　母は籠の中に妹は籠の外にあり

針がねの取りやりするなり

新聞の号外来る　曰（いわ）く伊庭想太郎（いばそうたろう）無期徒刑に処せらる

青物を入れたる笊（ざる）の中に虫鳴くとてその笊を坐敷に置いて聞く　閻魔（えんま）こほろぎにやあらんなどいふ

夜半家人を起して便通あり
よく眠る
この日水の如き唾(つばしきり)頻に出づ

九月十一日　曇

便通及細帯取換
朝飯　いも雑炊(ぞうすい)三碗　佃煮　梅干
牛乳一合ココア入　菓子パン
便通

昼飯　粥三碗　鰹（かつお）のさしみ　蜊汁（あさりじる）

間食　煎餅十枚ほど　紅茶一杯

夕飯　粥三、四碗　きすの魚田（ぎょでん）二尾　ふき膾（なます）三椀

佃煮　梨一つ

午前日南（にちなん）氏来る　話頭（わとう）、フランクリンの常識、アングロサクソンの特色、フランスは亡国的富、今の日本では真成のえらい奴はかへつてちちくれて世に出られぬこと等

午後　母神田へ

牧野の妻君国産を携(たずさ)へて玄関まで来る

つくつくぼーしつくつくぼーしばかりなり
つくつくぼーし明日なきやうに鳴きにけり
つくつくぼーし雨の日和(ひより)のきらひなし
家を遶(めぐ)りてつくつくぼーし樫(かし)林

夕飯やつくつくぼーしやかましき

母帰らる　河東(かわひがし)高浜(たかはま)二軒を訪(と)はれしに皆留守なりきと

例の理髪師雞頭の盆栽を携へ来る

ジヤガタラ雀今日も庭へ来る

点灯後小蟬（こぜみ）ほどの大きさの虫飛び来りラムプの側にある盆栽の雞頭を上下す　家人を呼んで何の虫ぞと聞けば「昨夜笊（ざる）の中にて鳴きたるはこれなりといふ

灯下にゆで栗七、八個くふ　母に皮をむいでもらふ

九月十二日　曇　時〻照る

便通及繃帯取代

朝飯　ぬく飯三椀　佃煮　梅干

牛乳五勺紅茶入　ねじパン形菓子パン一つ（一

つ一銭）

午飯　いも粥三碗　松魚（かつお）のさしみ　芋　梨一つ　林檎一つ　煎餅三枚

間食　枝豆　牛乳五勺紅茶入　ねじパン形菓子一つ

便通あり

夕飯　飯一碗半　鰻（うなぎ）の蒲焼（かばやき）七串　酢牡蠣（すがき）　キヤベツ　梨一つ　林檎一切

藻州（そうしゅう）氏来る

午後沼津より麓（ふもと）の手紙来る

麓留守宅より鰻の蒲焼を贈り来る

高浜より使(つかい)、茶一かん、青林檎二、三十　金一円持来る　茶は故政夫氏のくやみかへし、林檎は野辺(のへ)地(じ)山口某より贈り来る者、金円は臍斎(せいさい)より病気見舞

沼津　麓(ふもと)より小包便にて桃のかん詰二個来る

病閑に糸瓜(へちま)の花の落つる昼

夜病室の　庇(ひさし)に岐阜提灯(ぎふちょうちん)　灯（潮音所贈(ちょうおんしょぞう)）を点(とも)す

消えんとしてともし火(び)青しきりぎりす

昨日床屋の持て来てくれた盆栽

草花の鉢

並べたる床屋かな

昨日床屋ノ持テ来テクレタ盆栽
盆栽ノ草花
草花ノ鉢
並ベタル床屋カナ

九月十三日　曇

便通及繃帯取換

朝飯　ぬく飯三碗　佃煮　梅干

牛乳五勺紅茶入　菓子パン二つ

便通

午飯　粥三碗　堅魚（かつお）のさしみ　みそ汁一椀　梨一つ

林檎一つ　葡萄一房

間食　桃のかんづめ三個　牛乳五勺紅茶入　菓子パン

一つ　煎餅一枚

夕飯　稲荷鮓(いなりずし)四個　湯漬(ゆづけ)半碗　せいごと昆布の汁　昼のさしみの残り　焼せいご　肴古くしてくはれず

佃煮　葡萄　林檎

朝貝(あさがお)や絵の具にじんで絵を成さず

朝顔や絵にかくうちに萎(しお)れけり　此句既にあるか

朝顔(あさがお)のしぼまぬ秋となりにけり

葬の一輪ざしに萎れけり

朝皃ヤ
絵ノ具
ニジンデ
繪ヲ
成サズ

朝顔ヤ
繪ミウリ
ウチニ
萎レケリ
此句既ニアルカ

朝顔ノシボマヌ
秋トナリニケリ

蕣ノ一輪サシニ
萎レケリ

ジヤガタラ雀再び追込籠に入る（小き籠に餌（え）を入れて追込籠の側に置きしにジヤガタラ雀その籠の中に這入りて餌を食ひ居る処を口を塞（ふさ）ぎ取りたるなり）

我庭の三本（みもと）松伐りなば家主怒らん伐らずば緑はびこり　上つ枝は日影さへぎり下つ枝は露しづく垂（た）れうつくしき花もそだたすはしきやしうま木も枯れぬ我庭の三もと松上つ枝も下つ枝も伐れ家主怒るともさ庭べにはびこる松の枝伐らば家主怒らんさもあらばあれ

下蔭（したかげ）の草花惜み日を蔽（おお）ふ松が枝伐らん家主怒るとも

我庭の三もと松伐りあはれ深き千草（ちぐさ）の花に日の照るを見ん

夜涼如（やりょうみずのごとし）レ水書灯に迫る虫の声

夜涼如レ水天の川辺（かわべ）の星一つ

松虫や露に濡（ぬ）れたる絹団扇（うちわ）

むら雨の過ぎて雞頭の夕日かな

毒蝶の秋海棠（しゅうかいどう）を犯すかな
枝豆や病（やまい）の牀（とこ）の昼永（ながし）
枝豆や三寸飛んで口に入る

〔抹消　枝豆や盆に載せたる枝ながら〕

学校に行かず枝豆売る子かな
枝豆の月より先に老いにけり
枝豆のつまめばはぢく仕掛かな
明月（めいげつ）の豆盗人（ぬすびと）を照しけり？
枝豆のから棄てに出る月夜かな

芋を喰はぬ枝豆好（ずき）の上戸（じょうご）かな

芋あり豆あり女房に酒をねだりけり

明月や枝豆の林酒の池

枝豆や俳句の才子曹子建（そうしけん）

枝豆や月は糸瓜の棚に在り

『週報』募集俳句を閲（けみ）す　題は枝豆

俚歌（りか）に擬す

枝豆　枝豆　よくはぢく枝豆　ぷいと飛んで　三万里　月の兎（うさぎ）の目にあてた　目つから兎よくはぢく枝豆　十三夜のお月様

○

秋風や糸瓜の花を吹き落す

九月十四日　曇

午前二時頃目さめ腹いたし　家人を呼び起して便通あり　腹痛いよいよ烈(はげ)しく苦痛堪(た)へがたし　この間下痢水(すい)射(しゃ)三度ばかりあり　絶叫号泣

隣家の行山(ゆきやま)医を頼まんと行きしに旅行中の由(よし)　電話を借りて宮本医を呼ぶ

吐あり
夜明やや静まる　柳医来る　散薬と水薬とのむ
疲労烈し

氷片をかむ　あるいは葡萄酒に入れて
牛乳　葛湯（くずゆ）　ソップ　飴湯

九月十五日
昨夜疲れて善（よ）く眠る

牛乳　葛湯

昼飯　粥三碗　泥鰌(どじょう)鍋　牛乳　菓子パン　水飴

午後二度便通あり

夕飯　粥二碗　佃煮　味淋漬(みりんづけ)　飴湯

大阪青々(せいせい)より奈良漬を送り来る

加藤義叔母飯田町まで来たるついでなりとて来らる

土産(みやげ)味淋漬と薩摩流あげ蒲鉾(かまぼこ)

夕暮前やや苦し　喰過(くいすぎ)のためか

九月十六日　晴　ひやひやする

『週報』俳句検閲の際一息に急いで見をはるため目痛くなり昨日などは新聞を読めば目痛み明けられず　因(よっ)て今朝は新聞を見ず少しばかり律(りつ)に読ます

石巻(いしのまき)の野老(やろう)といふ人より小包にて梨十(とお)ばかりよこす

長十郎といふ梨とぞ　一つくふに美味あり

朝　牛乳　菓子パン二つ　梨一つ

昼　粥三碗　泥鰌鍋　薩摩あげ　味淋粕(かす)漬

梨一つ　葡萄一房

夕　粥三碗　鰻（うなぎ）　薩摩あげ　味淋粕漬
牛乳ココア入　菓子パン小二個　葡萄　梨一つ

午後四時頃次の間にて便通

○朝竹冷（ちくれい）氏の使（つかい）として望東（ぼうとう）及び某来る『五元集（ごげんしゅう）』を返し烏竜茶（ウーロン）を贈らる

先日久松老公七十の賀筵（がえん）二万円を費（ついや）されしと聞きしが今度韓帝五十の賀筵は二百万元を要する由（よし）　考へて見るほど妙な心持になる

今年の夏馬鹿に熱くてたまらず　新聞などにて人の旅行記を見るときわれもちよいと旅行して見ようと思ふ気になる　それも場合によるが谷川の岩に激するやうな涼しい処の岸に小亭があつてそこで浴衣(ゆかた)一枚になつて一杯やりたいと思ふた

『二六』にある楽天(らくてん)の紀行を見ると毎日西瓜(すいか)を食ふて居る　羨(うらや)ましいの何のてて

大坂では鰻の丼(どんぶり)を「まむし」といふ由　聞くもいやな名なり　僕が大坂市長になつたら先(ま)づ一番に布令を出して「まむし」といふ言葉を禁じてしまう

米国大統領マツキンレーは狙撃された結果終(つい)に死んだとの報が来た　無政府党といふ事につきては非常の疑(うたがい)がある

鼠骨(そこつ)来る　共に午餐(ごさん)をくふ

鼠骨去る　左千夫義郎(さちおぎろう)蕨真(けつしん)来る　晩餐（鰻飯(うなぎめし)）を共にす

夕飯前宮本国手(こくしゅ)来診

九月十七日　晴　ひやひやする

朝　粥三碗　佃煮　奈良漬　梅干

繃帯取換及便通

牛乳七勺位ココア入　あんパン一つ　菓子パン大一つ

昼　粥三碗　鰹(かつお)のさしみ　零余子(ぬかご)　奈良漬　梨一つ

飴湯　ゆで栗

夕　ライスカレー二碗　ぬかご　佃煮　なら漬

体温三十七度三分

繃帯取代後律四(りつよつや)谷加藤へ行く　加藤転居後始めて行く

なり　お土産は例の笹の雪

野老(やろう)氏に酬(むく)ゆ

石の巻の長十郎が見舞かな

吾を見舞ふ長十郎が誠かな

家人の秋海棠を剪(き)らんといふを制して

秋海棠に鋏(はさみ)をあてること勿(なか)れ

大坂青々(せいせい)に酬(むく)ゆ

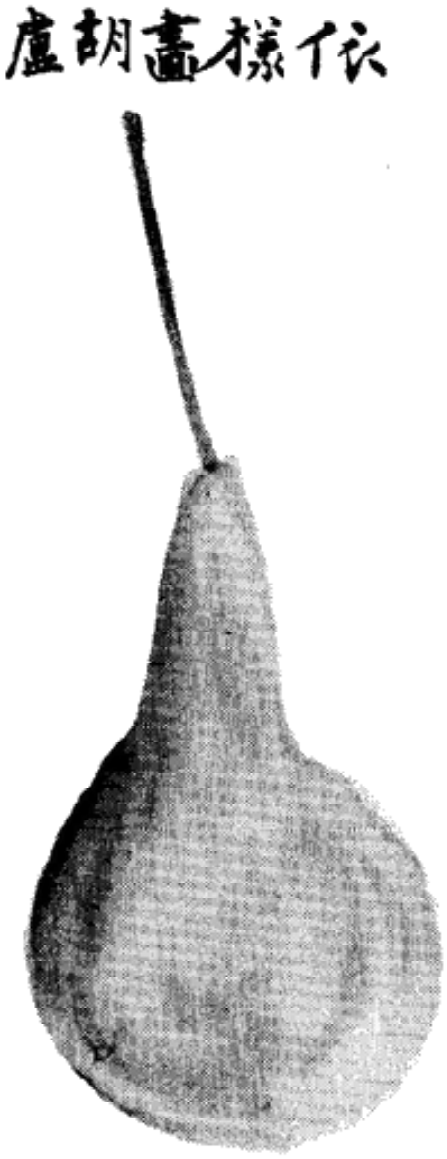
奈良漬の秋を忘れぬ誠かな

欲(ねむらんとほつす)睡

秋の蠅叩き殺せと命じけり

二、三日前ちきりし夕顔（実物大）？

依様画胡盧（ようによつてころをかく）



節(たかし)より送りこし栗は実の入らで悪(あし)き栗なり

真心の虫喰ひ栗をもらひけり

即事

いもうとの帰り遅さよ五日(いつか)月

母と二人いもうとを待つ夜寒(よさむ)かな

〇

夕顔の実の太けくに墨黒(すみぐろ)に目鼻をかかば人とならんかも

お土産はパインアップルの罐詰と索麺(そうめん)

律(りつ)帰る

九月十八日　晴寒し　朝寒暖計六十七度

朝　体温三十五度四分

　粥三椀　佃煮　なら漬

便通及細帯取換

昼　飯二碗　粥二碗　かじきのさしみ　南瓜（かぼちや）　ならづ

　け　梨一つ

便通

牛乳ココア入　ねじパン形菓子パン半分ほど食ふ　堅くてうまからす　因(よつ)てやけ糞(くそ)になつて羊羹(ようかん)菓子パン塩煎餅などくひ渋茶を呑む　あと苦し

夕　粥一椀余　煮松魚(にがつお)少しくふ　佃煮　ならづけ　梅干　煮茄子　葡萄

夜便通

今朝寒に堪(た)へず（昨夜は左足のさき終(つい)にあたたまらず）湯婆(たんぽ)を入る

種竹山人来話、少し話したる故か苦しくなる　山人は根津方角に転居せりと　美術学校改革につき職を辞したる話あり

独知居士来る　繃帯取換中にて帰る

庭に出来たただ一つの南瓜を取らしむ

午後虚子来る　晩飯をくふて帰る　虚子は九段坂上に転居せり　家新し　家賃十六円なりと

晩飯後腹はりて苦し　四、五日前の薬を出して呑む

伊豆修禅寺の岡麓よりさらし飴をよこす

母佃煮買ひに行かる

シャツ着換、蒲団取換、寒さの用意なり
坂本町祭の太鼓聞ゆ
玻璃(はり)窓外星二、三点
犬頻(しき)りに吠(ほ)ゆ
隣の時計九時を打つ

九月十九日　晴

便通
朝飯　粥三碗　佃煮　奈良漬

午飯　冷飯(ひやめし)三碗　堅魚(かつお)のさしみ　味噌汁さつまいも　佃煮　奈良漬　梨一つ　葡萄一房

間食　牛乳五勺ココア入　菓子パン　塩煎餅　飴一つ

渋茶

便通及繃帯取替

晩飯　粥三碗　泥鰌鍋　キヤベツ　ポテトー　奈良漬

梅干　梨一つ

つくつくぼうしなほ啼(な)く　○追込の小鳥啼(な)く　○向(むかい)の子供啼く　○どこやらの汽笛鳴る（午時(ひるどき)の景）

自分が旅行したのは書生時代であったので旅行といへば独り淋しく歩行いて宿屋で独り淋しく寐るものぢやと思ふて居る。それだから到る処で歓迎せられて御馳走になるなどといふ旅行記を見ると羨ましいの妬ましいのてて

奥羽行脚のとき鳥海山の横の方の何とかいふ処であつたが海岸の松原にある一軒家にとまつたことがある　一日熱い路を歩行いて来たのでからだはくたびれきつて居る　この松原へ来たときには鳥海山の頂に僅に夕日が残つて居る時分だからとても次の駅まで行く勇

気はない　止むを得ずこの怪しい一軒家に飛び込んだ　勿論(もちろん)一軒家といふても旅人宿の看板は掛けてあつたのできたない家ながら二階建になつて居る、しかしここに一軒家があつてそれが旅人宿を営業として居るといふに至つてはどうしても不思議といはざるを得ない　安達(あだち)ヶ原(はら)の鬼のすみかか武蔵野の石の枕でない処が博奕(ばくち)宿と淫売宿と兼ねた処位ではあらうと想像せられた　自分がここへ泊るについて懸念に堪へなかつたのはそんなことではない　食物のことであった　連日の旅にからだは弱つてゐるし今日は殊に路端(みちばた)へ倒れるほどに疲れて居るの

であるから夕飯だけは少しうまい者が食ひたいといふ注文があるのでその注文はとてもこの宿屋でかなへられぬといふことであつた　けれどももう一歩も行けぬからそんなことはあきらめるとして泊ることにした　固(もと)より門も垣(かき)も何もない　家の横に廻つてとめてくださいといふたが客らしい者は居ないやうだから自分もきつとことわられるであらうと思ふた、ところが意外にもあがれといふことであつた　草鞋(わらじ)を解いて街道に臨(のぞ)んだ方の二階の一室を占めた　鳥海山は窓に当つてゐる　そこで足投げ出して今日の草臥(くたびれ)をいたはりながらつくづくこの家の形

勢を見るに別に怪むべきこともない　十三、四の少女と三十位の女と二人居るが極めてきたない風(ふう)つきでお白粉(しろい)などはちつともない　さうして客は自分一人である、などと考へて居ると膳が来た　驚いた　酢牡蠣(すがき)がある　椀の蓋(ふた)を取るとこれも牡蠣だ　うまいうまい　非常にうまい　新しい牡蠣だ　実に思ひがけない一軒家の御馳走であつた　歓迎せられない旅にも這種(このしゅ)の興味はある

長塚より鴫(しぎ)三羽小包にて送る由の報来るその末に

昨今(さっこん)秋もやうやうけしき立(だちもうしそうろう)申候　百舌(もず)も鳴き出し候　椋(むく)とりもわたり申候　蕎麦(そば)の花もそろそろ咲

出し侯　田の出来は申分(もうしぶん)なく秋蚕(あきご)も珍しき当りに候

とあり田舎の趣(おもむき)見るが如し　ちよつと往て見たい

母は稲の一穂を枕元の畳(たたみ)のへりにさされた

黙然(もくねん)と糸瓜(へちま)のさがる庭の秋

夕顔の愚に及ばざるふくべかな

日掩(ひおいだな)棚糸瓜の蔓(つる)の這(は)ひ足らず

美人の団扇(うちわ)持ちたる図

絹団扇それさへ秋となりにけり

夕飯後鴫(しぎ)の小包到着　三羽一くくりにしてあり

淋しさの三羽減りけり鴫の秋

家賃くらべ

虚子（九段上）十六円　瓢亭（番町）九円　碧梧桐（猿楽町）七円五十銭　四方太（浅嘉町）五円十五銭　鼠骨 豹軒同居（上野涼泉院）二円五十銭　吾廬（上根岸鶯横町）六円五十銭　ホトトギス事務所四円五十銭　把栗（大久保）四円　秀真（本所緑町）四円（畳建具なし）

自分は一つの梅干を二度にも三度にも食ふ　それでもまだ捨てるのが惜い　梅干の核は幾度吸はぶつてもなほ

酸味を帯びて居る　それをはきだめに捨ててしまうといふのが如何にも惜くてたまらぬ

貴人の膳などには必ず無数の残物があつてあたら掃溜に捨てらるるに違ひない　肴の骨には肉が沢山ついて居るであらう　味噌汁とか吸物とかいふものも皆までは吸ひ尽してないであらう　かういふ者こそ真に天物を暴何とかする者といふべしだ　これを彼孤児院とか養育院とかに寄附して喰はすやうにしたら善いだらう　自分の内でも牛乳を捨てることが度々あるのでいつでもこれを乳のない孤児に呑ませたらと思ふけれど仕方がな

い　何かかういふ処へ連絡をつけて過を以て不足を補ふやうにしたいものだ

兵営や学校の残飯は貧民の生命であるといふから家々の残飯も集めて廻るわけに行かないだらうか。さう思ふと犬や猫を飼ふて牛肉や鰹節をやるなどは出来たことでない　小鳥に粟(あわ)をやるさへ無益な感じがする

宮内省の観桜(かんおう)の御宴(ぎょえん)などが雨のためやみになつたといふやうな場合には用意してあつた御馳走は養育院孤児院のやうな処へ下さるといふことである

松山で何がしが孤児院のやうなものを開いたら若い女

学生が饅頭一袋持つて来て名を言はずに帰つたさうな

九月二十日　曇　時〻雨

朝　ぬく飯三碗　佃煮　なら漬

午(ひる)　粥三わん　焼鴫(やきしぎ)三羽　キヤベージ　なら漬　梨一つ　葡萄

間食　牛乳一合ココア入　菓子パン大小数個　塩煎餅

便通及繃帯取換

晩　与平鮓(よへいずし)二つ三つ　粥二碗　まぐろのさしみ　煮茄

子　なら漬　葡萄一房

夜　林檎二切　飴湯

十時半寝(しん)に就(つ)く

昨夜上野の梟(ふくろう)鳴く

『週報』募集俳句（題商）を閲(けみ)す

『俳星』を見る　露月(ろげつ)の日記あり　その近状を知るに足る　我日記も露月に見せたし　同雑誌牛伴(ぎゅうはん)選天の句に

草に火を落して行くや虫送(むしおくり)　某

といふあり　趣なしといふに非(あら)ず月並調に近きを嫌ふ

格堂(かくどう)選天の句に

草に据(す)ゑる五右衛門風呂や雁(かり)の声　某

といふあり　面白き句なり　しかし格堂いまだ俳句の品格といふことを知らずと見えたり　但(ただし)彼の作る所

芋の葉に昨夜の雁の涙かな　格堂

松露(しょうろ)掘って山谷(さんこく)の廬(ろ)を叩きけり　同

遥(はるか)に俗流の上に出づ　侮(あなど)るべからず

露月選地の句に

草花を見つめて鹿の憂寐(うきね)かな　　某

といふあり　これ位初心な句を露月は得(え)見わけざるにや　露月もと鈍根、長く工夫して漸(ようや)く一条の活路を得たる者しかもここに多少上慢の心起りて復(また)一段の進歩を見ず　平凡の趣(おもむき)　微細の趣はいまだ全く解せざるが如し　なほ三折(せつ)を要す

夕刻左千夫本所(ほんじょ)の与平鮓(よへいずし)一折を携(たずさ)へて来る

上野の森の梟しばし鳴いてすぐやむ

虚子より『ホトトギス』先月分のとして十円送り来る

律(りつ)は理窟づめの女なり　同感同情のなき木石(ぼくせき)の如き女

なり　義務的に病人を介抱することはすれども同情的に病人を慰むることなし　病人の命ずることは何にてもすれども婉曲に諷したることなどは少しも分らず　例へば「団子が食ひたいな」と病人は連呼すれども彼はそれを聞きながら何とも感ぜぬなり　病人が食ひたいといへばもし同情のある者ならば直に買ふて来て食はしむべし　律に限ってそんなことはかつてなし　故にもし食ひたいと思ふときは「団子買ふて来い」と直接に命令せざるべからず　直接に命令すれば彼は決してこの命令に違背することなかるべし　その理窟つぽいこと言語道断な

り　彼の同情なきは誰に対しても同じことなれどもただカナリヤに対してのみは真の同情あるが如し　彼はカナリヤの籠の前にならば一時間にても二時間にてもただ何もせずに眺めて居るなり　しかし病人の側（そば）には少しにても永く留（とど）まるを厭（いと）ふなり　時々同情といふことを説いて聞かすれども同情のない者に同情の分るはずもなければ何の役にも立たず　不愉快なれどもあきらめるより外（ほか）に致方（いたしかた）もなきことなり

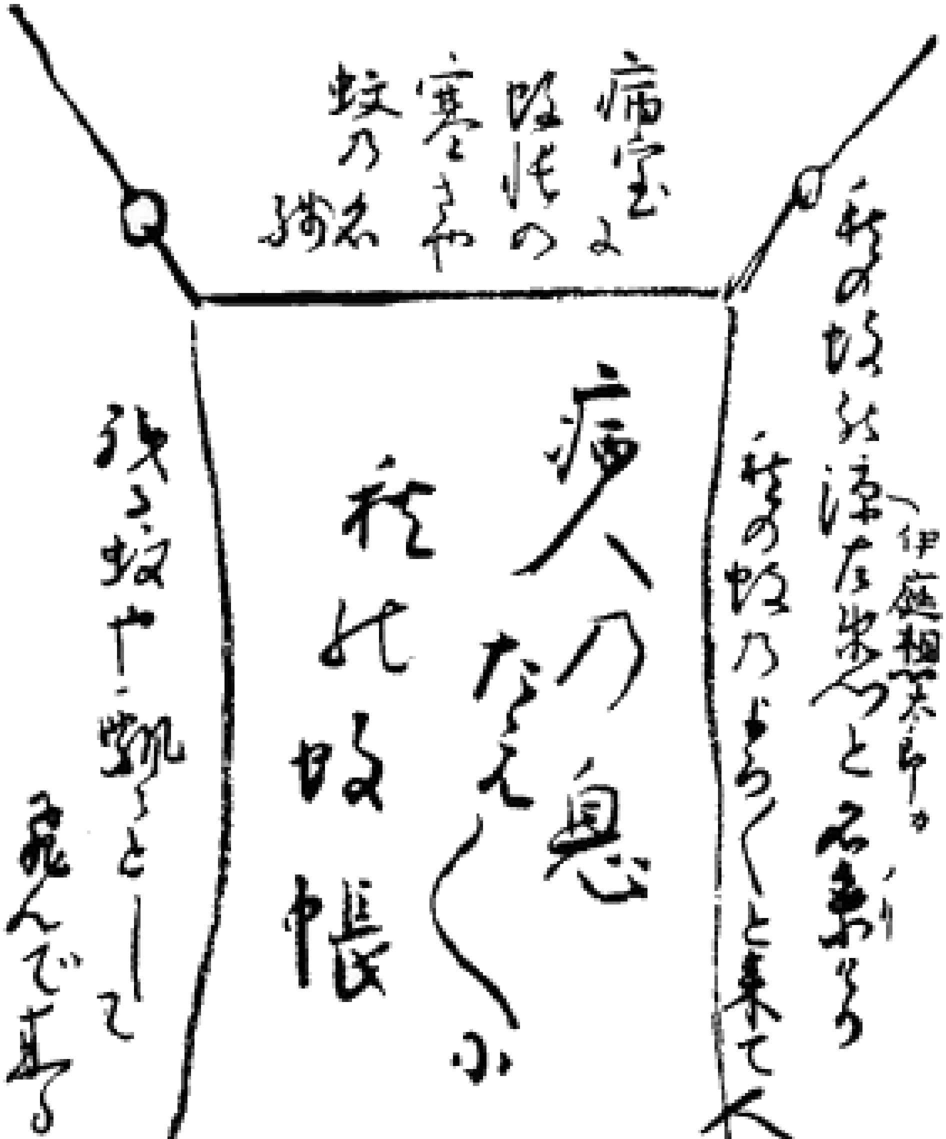
病人の息たえ〴〵に秋の蚊帳

病室に蚊帳の寒さや蚊の名残

秋の蚊の源左衛門と名乗（なのり）けり　伊庭想太郎カ

秋の蚊のよろ〳〵と来て人を刺す

残る蚊や瓢〻として飛んで来る


秋の蚊のよろよろと来て人を刺す
病人の息たえだえに秋の蚊帳

九月二十一日　彼岸(ひがん)の入(いり)　昨夜より朝にかけて大雨　夕晴

便通、繃帯とりかへ

朝　ぬく飯三わん　佃煮　梅干
　牛乳一合ココア入　菓子パン　塩せんべい

午　まぐろのさしみ　粥二わん　なら漬　胡桃(くるみ)煮付
　大根もみ　梨一つ

便通

間食　餅(もち)菓子一、二個　菓子パン　塩せんべい　渋茶

食過のためか苦し

晩　きすの魚田（ぎょでん）二尾　ふきなます二椀　なら漬　さし

みの残り　粥三碗　梨一つ　葡萄一房

律は強情なり　人間に向つて冷淡なり　特に男に向つて shy なり　彼は到底配偶者として世に立つ能（あた）はざるなり　しかもその事が原因となりて彼は終（つい）に兄の看病人となりをはれり　もし余が病後彼なかりせば余は今頃如何にしてあるべきか　看護婦を長く雇（やと）ふが如きは我能（わがよ）く為（な）す所に非ず　よし雇ひ得たりとも律に勝（まさ）る所の看護婦即

ち律が為すだけの事を為し得る看護婦あるべきに非ず　律は看護婦であると同時にお三どんなり　お三どんであると同時に一家の整理役なり　一家の整理役であると同時に余の秘書なり　書籍の出納原稿の浄書も不完全ながら為し居るなり　しかして彼は看護婦が請求するだけの看護料の十分の一だも費さざるなり　野菜にても香の物にても何にても一品あらば彼の食事はをはるなり　肉や肴を買ふて自己の食料となさんなどとは夢にも思はざるが如し　もし一日にても彼なくば一家の車はその運転をとめると同時に余は殆んど生きて居られざるな

り　故に余は自分の病気が如何やうに募(つの)るとも厭はず　ただ彼に病(やまい)なきことを祈れり　彼あり余の病は如何ともすべし　もし彼病まんか彼も余も一家もにつちもさつちも行かぬこととなるなり　故に余は常に彼に病あらんよりは余に死あらんことを望めり　彼が再び嫁して再び戻りその配偶者として世に立つこと能はざるを証明せしは暗(あん)に兄の看病人となるべき運命を持ちしためにやあらん　禍福錯綜(かふくさくそう)人智の予知すべきにあらず

○

秋の蠅(はえ)蠅たたき皆破れたり

病室や窓あたたかに秋の蠅

草木国土悉皆成仏（そうもくこくどしっかいじょうぶつ）

糸瓜さへ仏になるぞ後るるな（へちま）（おく）

成仏（じょうぶつ）や夕顔の顔へちまの屁（へ）

彼は癇癪（かんしゃく）持なり　強情なり　気が利かぬなり　人に物問ふことが嫌ひなり　指さきの仕事は極めて不器用なり　一度きまつた事を改良することが出来ぬなり　彼の欠点は枚挙に遑（いとま）あらず余は時として彼を殺さんと思ふほどに腹立つことあり　されどその実彼が精神的不具者であるだけ一層彼を可愛く思ふ情に堪へず　他日もし彼

が独りで世に立たねばならぬときに彼の欠点が如何に彼を苦むるかを思ふために余はなるべく彼の癇癪性を改めさせんと常に心がけつつあり　彼は余を失ひしときに果して余の訓戒を思ひ出すや否や

病勢はげしく苦痛つのるに従ひ我思ふ通りにならぬために絶えず癇癪を起し人を叱す　家人恐れて近づかず一人として看病の真意を解する者なし

陸奥福堂高橋自侍の如きも病勢つのりて後はしばしば妻君を叱りつけたりと

○

三人集つて菓子くふ
肴屋より約束のきすを持つて来ぬとて母肴屋に行かる
九日の月糸瓜棚にあり
向つ家(むかつや)に謡(うたい)の声す

今日は車屋水汲(くみ)に来ず
律(りつ)綿買ひに行く
晩餐後は直(ただち)に眠気を催すを常とす　されど余り早く寐ては夜半以後に寐られぬ憂(うれい)あり　故になるべく長く起きて居るなり　それでも八時過には寐ること多し　消

化のためにも少しは長起(ながおき)がよきなり

九月廿二日　晴

便通及ほうたい取換

朝　ぬく飯四わん　佃煮　なら漬　葡萄三房

午　まぐろのさしみ　粥一碗半　みそ汁　なら漬　梨

一つ

便通

間食　牛乳一合ココア入　菓子パン

背中ぞくぞくする　体温卅七度七分　毛布著る　汗少し出る

夕　粥三わん　鰌(どじょう)鍋　焼茄子　さしみの残り　なら漬

瓢亭来る　雑誌ではだめだ新聞起さればいかぬといふ

原千代子来る　川崎に頼まれたりとて葡萄一籃(ひとかご)を持て来る　これから今戸へ往(い)くなりとて自らこねた木兎(みみずく)の香合(こう)（まだ焼かぬ）を見せる　それから蒔絵(まきえ)の話を聞く

角力(すもう)

幕の内になって故郷に帰りけり

阿波人（あわびと）は阿波の相撲をひいきかな

大関にならで老いぬる角力かな

大関と大関と組む角力かな

幾秋を負けて老いぬる角力かな

角力取に角力取の子もなかりけり

まはし著けて子供角力の並びけり

朝左の足冷えて温まらず　温めかたがた按摩（あんま）せしむ

夕飯頃義郎（ぎろう）秋水（しゅうすい）大団扇（おおうちわ）を携へて来る　直径三尺ばかり　秋水の画あり（我々歌仲間の盆踊りする様）

日いまだ全く暮れぬに　梟（ふくろう）御院殿の方に当りて鳴く

『千松島』にて左の句を見る

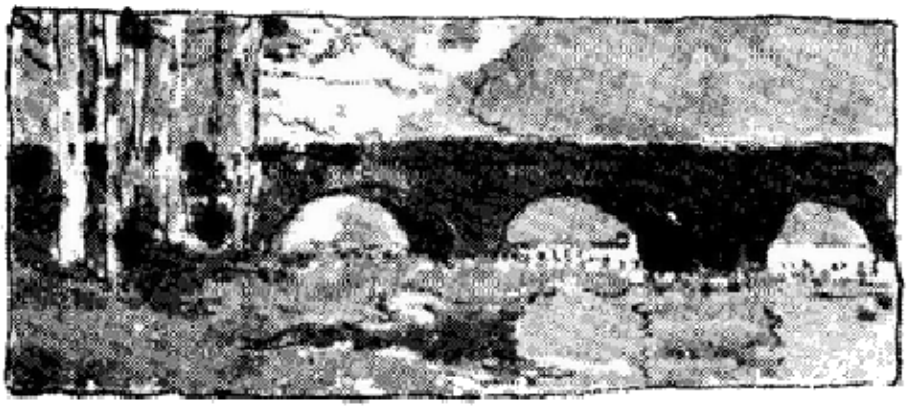
霧なから大きな町に出にけり　　移竹

余多年この感ありて句にならず　今この句を見て更に移竹の技倆に驚く　因に云この頃所々に移竹を論ずる者出づ　皆自己の創見の如くいふ　されど移竹を論じたるは余が太祇論の中に書きたるが恐らくは嚆矢ならん

九月廿三日　晴　寒暖計八十二度（午后三時）

未明に家人を起して便通あり

朝　ぬく飯三わん　佃煮　なら漬　胡桃（くるみ）飴煮
便通及繃帯とりかへ　腹なほ張る心持あり
牛乳五合ココア入　小菓数個
午　堅魚（かつお）のさしみ　みそ汁実は玉葱（たまねぎ）と芋　粥三わん
　なら漬　佃煮　梨一つ　葡萄四房
間食　牛乳五合（ママ）ココア入　ココア湯　菓子パン小十数個　塩せんべい一、二枚
夕　焼鰯（いわし）四尾　粥三わん　ふじ豆　佃煮　なら漬
　飴二切



ほととぎす着

昨日虚子君の消息を読み泣きました　この画はグレーといふ田舎の景色なり　御病床の御慰みまで差上候　　木魚生

只今は帰りがけに巴里（パリ）によりて遊居候　その内に帰朝致久振（ひさしぶり）にて御伺申すべく存候　御左右その後いかが被為入候哉

三十四年八月十八　　呉秀三

本日呉君等と木魚老の寓をたたき談笑時を移し貴下の御噂なんどいたし候　未だ拝眉の栄を得ず候へども折角御加養御快癒のほど乍陰（かげながら）奉祈上候　　和田英作

私も未だ御目もじしない者ですが同席しましたから御見舞申上る栄を得たのです　　満谷国四郎

巴理（パリ）浅井氏より上の如き手紙来る

五月雨（さみだれ）◯　芭蕉

五月雨をあつめて早し最上川

この句俳句を知らぬ内より大きな盛んな句のやうに思ふたので今日まで古今有数の句とばかり信じて居た　今日ふとこの句を思ひ出してつくづくと考へて見ると「あつめて」といふ語はたくみがあつて甚だ面白くないそれから見ると

五月雨や大河を前に家二軒　蕪村

といふ句は遥（はる）かに進歩して居る

九月廿四日　秋分　晴

便通及繃帯取かへ

朝飯　ぬく飯三わん　佃煮　なら漬　牛乳ココア入
　餅菓子一つ　塩せんべい二枚

午飯　粥三わん　かじきのさしみ　芋　なら漬
　梨一つ　お萩一、二ケ

間食　餅菓子一つ　牛乳五勺ココア入　牡丹餅一つ
　菓子パン　塩せんべい　渋茶一杯

夕　体温卅七度七分　寒暖計七十七度

生鮭照焼（なまざけてりやき）　粥三わん　ふじ豆　なら漬　葡萄一ふさ

夜　便通やや堅し

朝　歌原大叔母（うたはらおおおば）御来らる　お土産餅菓子

陸（くが）より自製の牡丹餅をもらふ　此方（こなた）よりは菓子屋に誂（あつら）へし牡丹餅をやる　菓子屋に誂へるは宜（よろ）しからぬことなり　されど衛生的にいはば病人の内で拵（こしら）へたるより誂へる方宜しきか　何にせよ牡丹餅をやりて牡丹餅をもらふ　彼岸（ひがん）のとりやりは馬鹿なことなり

お萩くばる彼岸の使(つかい)行き逢(あ)ひぬ
梨腹も牡丹餅腹も彼岸かな
餅の名や秋の彼岸は萩にこそ
西へまはる秋の日影や糸瓜(へちま)棚

高橋より幸便に信州の氷餅を贈り来る
芭蕉の

あら海や佐渡に横たふ天の川　　はせを

といふ句はたくみもなく疵(きず)もなけれど明治のやうに複雑な世の中になつてはこんな簡単な句にては承知すまじ　さりながら

霧ながら大きな町に出にけり　　移竹

の如き趣に至つてはかへつて解せざる者多し

この頃の若い人は歩行(あるく)旅行の趣を解せず

この頃地方の俳句雑誌を見るに東京にては太祇(たいぎ)の流行やんで召波(しようは)に移れりなど書けり　片はら痛きことなり　余らは諸子の句中太祇らしき句一句も見たることなくかつ召波調の句とはどんな句やらまだ研究もとどかぬにさてさて素(す)ばしこい世の中なり

昨年のはじめ頃にや余

のびのびし帰り詣(もうで)や小六(こ)月

といふ句を得ていくらか太祇めきたるやうに思ひ始めてのことなればうれしくこれを『十句集』に出したる一点もつかざりきと覚ゆ

麦人（ばくじん）も太祇好（ずき）なり　この男普通才子の如く敏捷（びんしょう）にきがかへつてある趣に入ること深し　ある時来て

さそはれて妻をやりけり二の替（かわり）

といふ余の句を短冊に書けといふ　けだしその太祇調なるを以ての故ならん　その時彼の句も聞き面白しと思ひしが忘れたり

太祇のまねするといふても彼の集中第一流ともいふべ

き句はまねらるる者にあらず　それ以下の句をまれるなり

移し植ゑし秋海棠（しゅうかいどう）や寐て見ゆる

十人の家内（かない）や芋の十皿（とさら）程

盛り分つ十皿の芋や台所

大家（おおいえ）や芋煮えて居る台所

蓮（はす）の実や飛んで小僧の口に入る

筆も墨も瀉瓶（しびん）も内に秋の蚊帳（かや）

夜八時頃左向く　頻(しき)りに俳句を考へつつあるに俳気さ
さず眠気ざしてならず　遂(つい)に眠る　左向になれば直(すぐ)に眠
たくなるなり

九月廿五日　晴

朝寐の気味あり

朝飯　粥三わん　佃煮　なら漬　牛乳ココア入　菓子
パン小二

便通と繃帯取かへ

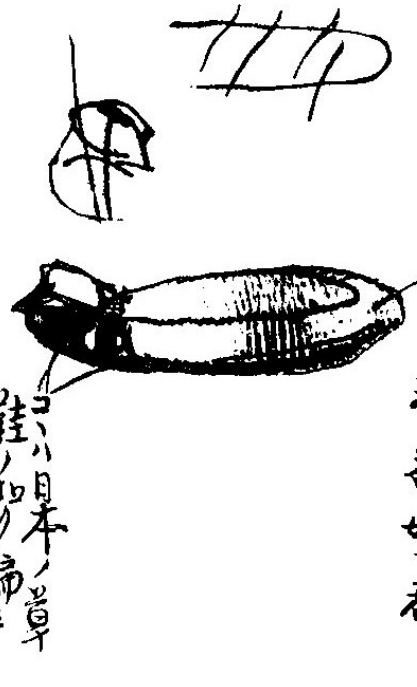
午飯　粥四わん　かじきのさしみ　みそ汁実は茄子
　なら漬　あみ佃煮梨一つ　餅菓子二つ

間食　菓子パン　塩煎餅　餅菓子一つ　おはぎ半個
　牛乳五勺ココア入

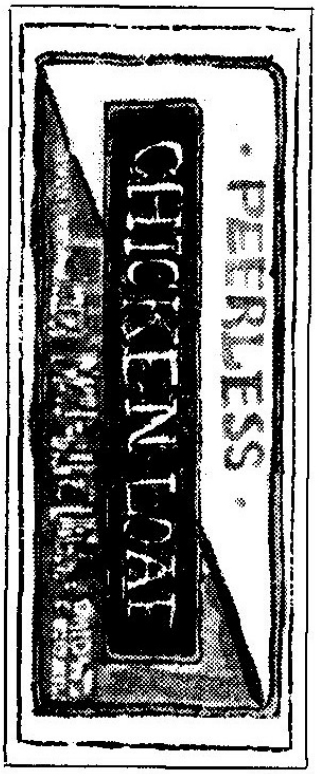
夕
体温卅六度九分
　鰌(どじょう)鍋　若和布(わかめ)二はい酢　馬鈴薯(じゃがいも)　胡桃(くるみ)　なら
漬　あみ佃煮　粥三わん　葡萄一ふさ

高浜より小包にて曲物（まげもの）一個送り来る　小鰕（こえび）の佃煮なり
前日あみの佃煮この辺になきこと虚子（きよし）に話したる故なり
午後三人集つて菓子をくふ
南品川中村某より朝鮮の草鞋（わらじ）といふ者を贈り来る

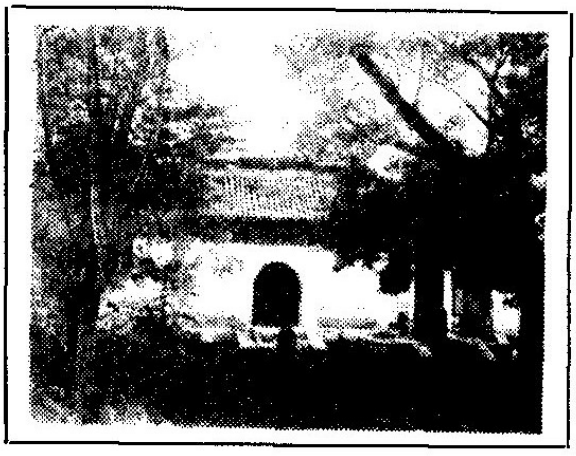
これは観世捻(より)の如き者



これは前日池内氏より
贈られたるかん詰の外
皮の紙製の袋の側面也
(雞肉を敲(たた)きて味噌の如くしたる者
なり CHICKEN LOAF



ここは日本の草
鞋の如く編み
たれど原料不明



天津の肋骨より来
りしはがきの半分

この紙の箱に今は方一寸位の脱脂綿の小片沢山入れあり　これは毎日歯齦(はぐき)の膿(うみ)を押し出してはこの綿のきれで拭(ぬぐ)ひ取るなり

鼻毛を摘(つ)む

庭の棚に夕顔三つ瓢(ふくべ)一つ干瓢(かんぴょう)三つ　それより少しもふゑぬに糸瓜(へちま)ばかりはいくらでもふゑる今ちよつと見たところで大小十三ほどあり

今宵(こよい)珍らしく夕顔の花一つ咲く　糸瓜の花も最早(もはや)二つ

三つ見ゆるのみとなれり

ひぐらしの声は疾(と)くより聞かず　つくつくぼうしはこの頃聞えずなりぬ

本膳の御馳走食ふて見たし

夕方　梟(ふくろう)　御隠殿の方に鳴く

ガチヤガチヤ庭前にてやかましく鳴く　この虫秋の初めは上野の崖(がけ)の下と思ふあたりにてさわがしく鳴きその後次第次第に近より来ること毎年同じことなり

九月廿六日　曇　午後小雨

朝　ぬく飯四わん　あみ佃煮　はぜ佃煮　なら漬（西瓜）

繃帯取替及便通

牛乳一合ココア入　餅菓子一個半　菓子パン　塩せんべい

午　まぐろのさしみ　胡桃　なら漬　みそ汁実はさつまいも　梨一つ

間食　葡萄　おはぎ二つ　菓子パン　塩せんべい　渋茶

便通

夕　キヤベツ巻一皿　粥三わん　八つ頭　さしみの
残り　なら漬　あみ佃煮　葡萄十三粒

虚明より義仲寺の刷物三枚送り来る　前に操子にもらひたると異なり

家人屋外にあるを大声にて呼べど応へず　ために癇癪起りやけ腹になりて牛乳餅菓子などを貪り腹はりて苦し　家人屋外にありて低声に話しをるその声は病牀に聞ゆるに病牀にて大声に呼ぶその声が屋外に聞えぬ理なし　それが聞えぬは不注意の故なりとて家人を叱る

午後家庭団欒(だんらんかい)会を開く　隣家よりもらひしおはぎを食ふ

『週報』募集俳句（ふくべ）を閲(けみ)す

小草(おぐさ)の盆栽に螳螂(かまきり)の居るをそのまま枕元に持て来ておく

昨日も今日も夕飯食はぬ内にはや眠たき気味あり　この模様にてはやがて昼も夜もうつらうつらとして日記書くのもいやになるやうな時来らんかと思ふ

新聞雑誌を見て面白しと思ひしことの今に脳裏に残り居る者を試(こころみ)に列記せんか

その一

ビスマルク曰(いわ)く新聞とは紙の上にすりつけたるインキなり

その二

曰くお山の大将　曰く総領の甚六(じんろく)　曰く石部金吉(いしべきんきち)
曰く大馬鹿三太郎　曰く知らぬ顔の半兵衛　曰く権兵衛　曰く助平　曰く何　曰く何

その三

黒船浦賀に来りし時の狂句

おどかしてやつたとペルリ舌を出し

その四

田舎芝居の舞台にて大勢の役者がせりふを割つて一句づついふとき一人の役者が次の役者のせりふをいふてしまひしに次の役者は何といふべきすべも知らず当惑せしがやがて曰く

拙者のせりふがござらぬわい

その五

嵯山和尚（がざんおしよう）天竜寺の泉水のほとりを散歩し居りしに丁（でつ）稚（ち）らしき者来りて、和尚さんこの池の鯉（こい）おくれんか、といふ　和尚いふ、この池の肴取つてはならぬぞ、

丁稚、いふ、そんなことといふてお前が取るのではないかな、和尚、いふ、嵯山もこの返答には困つたわいと、和尚弟子に謂(いい)て曰く何といふても無我には勝てぬぞや

その六

伊藤侯の薩摩下駄(さつまげた)が桐の柾(まさ)で十五円、落語家円遊(えんゆう)の駒下駄が何とかの鼻緒(はなお)で七円

九月廿七日　曇（陰暦八月十五日）

便通

朝飯　ぬく飯四わん　あみ佃煮　はぜ佃煮　なら漬

牛乳五勺ココア入　菓子パン少々

午飯　まぐろのさしみ　煮茄子　なら漬　粥三わん

梨一　焼栗五、六　かん詰のパインアツプル

間食　牛乳五勺ココア入　菓子パン　塩煎餅十個ばかり

夕　少し発熱の気味あり　測れば卅七度七分

便通及繃帯とりかへ

さつま四わん（これは小鯛の骨を焼きて善く叩きて粉にし味噌に和してぬく飯にかけ食ふなり　尤鯛の肉は生にて味噌に混じあるなりパインアツプル）

枝豆　あげもの一　かん詰の鳳梨

母広徳寺（こうとくじ）前にて碁石茶（ごせきちゃ）等の種五、六袋買ふて帰らる（罌粟は余の所望（しよもう）なり）　おみやげ焼栗一袋（十個入二銭）は上野広小路六阿弥陀へ参られし帰り門前の露店にて求められたりと　余、何故に、もすこし多く買はれざるかと問へば余りに高き故なりと

東京の婦女子時に神詣寺参（かみもうでてらまいり）などと称（とな）へて出歩行（あるく）は多く料理屋にて飯くふか少くとも蕎麦（そば）屋汁粉（しるこ）屋位のおごりはするなり　手土産を持ち帰るはいふまでもなし　田

舎者はさる贅沢を知らず　内の者などたまたま出歩行く（ある）も浅草ならば仲店（なかみせ）を見物して一銭か二銭の花　釵（かんざし）一、二本買ふ位に過ぎず　その釵何にすると問へば国の誰それに送るなりと　そんな釵わざわざ三百里の道を送らずとも松山にもいくらもあるべしといへばさにあらず江戸土産といへば善悪にかかはらずうれしきこと子供の時覚えありと　やさしき心がけ、生活の程度はまだこんな者なり

浄名院（上野の律院）に出入る人多く皆糸瓜（へちま）を携へた

りとの話、糸瓜は咳(せき)の薬に利(き)くとかにてお呪(まじない)でもしてもらふならん　けだし八月十五日に限るなり

月なし

『ホトトギス』十二号来る

九月廿八日　曇

例の如く湯婆(たんぽ)を入れる

朝飯　ぬく飯三わん　はぜ佃煮　なら漬

牛乳　菓子パン

便通及繃帯

午飯　まぐろのさしみ　粥三わん　みそ汁実は葱　あみの佃煮　鰕(えび)の佃煮　梨一　葡萄廿粒

間食　牛乳　菓子パン　塩せんべい　かん詰鳳梨(パインアツプル)

林檎一

便通　体温卅七度六分

夕飯　鰈(かれい)一尾（十四銭）　粥三わん　焼茄子　あみ佃煮　鰕佃煮　ぶだう一ふさ　やきいも

鼻糞をせせる　鼻血出る

午後秀真芳雨(ほつまほうう)二人来る　二、三日前函館より帰りしと

なり

函館の展覧会は損になりたるを土地の賛助員に出してもらふて事すみたりと　青森の林檎一籃（ひとかご）おみやげにもらふ（茂春（もしゆん）と三人連名）

いざよひも月出ず
門附（かどづけ）表を流して通る

さつま芋を焼いてもらふて食ふ
この夜蚊帳をつらず

二つ三つ蚊の来る蚊帳の別かな
蚊帳つらで画美人見ゆる夜寒かな

九月廿九日　曇　湯婆（たんぽ）と懐炉（かいろ）を入れる
便通及繃帯
寒暖計　六十七度
朝飯　ぬく飯四わん　あみ鰕（えび）佃煮　なら漬
　牛乳五勺ココア入　菓子パン
午飯　さしみ　粥三わん　みそ汁　佃煮　なら漬
　牛乳五勺ココア入　菓子パン　梨一　りんご一
間食　菓子パン　塩せんべい　紅茶一杯半

夕　体温卅七度三分

鰻飯一鉢（十五銭）飯軟かにして善し　芋　糠味噌漬

夜便通

把栗来る　長州へ行きかつ故郷に行きてすぐ帰るとなり　妻君孕みしとなり　男子生るべしとの予言なり　天津より来りし押絵一枚産屋のかざりにと贈る

午飯のときさしみ悪く粥も汁も生ぬるくて不平に堪へず　牛乳などいろいろ貪る

いりたてお豆食ひたし

『ホトトギス』にある文の中碧梧桐（へきごどう）の「富士の頂上」は作者の手柄と見るべきところはなけれど場所が場所だけに富士を知らぬ我らには面白く読まれた　但（ただし）結句は非常にまづい　四方太（しほうだ）の墓参は拙（せつ）のまた拙なる者ぢや　四方太は主観的懐旧談とでもいふべき者を書くといつでも失敗する　この前に洪水の懐旧談をやつてその時も失敗した　四方太先生ちとしつかりしたまへ余り凝（こ）り過ぎて近来出来が悪いぢやないか　もしまた体が衰弱して居るならばしつかり御馳走を食ひたまへ　把栗君でさ

へ子を生むといふぢやないか　さて紅緑（こうろく）の「下駄の露」は「富士の頂上」と同じく作者の工夫は見えぬ　しかし写生に行かれた御苦労は受け取れる　もし吉原十二時といふやうに完成したらば面白からう　この「下駄の露」（これは吉原の朝を写したるもの）について思ひ出したことがある　あるとき一念に伴はれて角海老（かどえび）に遊んだ次の朝一念は居続けするといふので蒲団かぶつて相方とさし向ひでうまさうに豆腐か何か食つてたから自分は独り茶屋へ帰つてその二階からしばらく往来を見て居た　すると その時横町から出て病院へでも行くのであらうと思

はれる女が二人頭は大しやぐま、美しき裲襠(うちかけ)着て静かに並んで歩行(あるく)後姿に今出たばかりの朝日が映つて竜か何かの刺繍がきらきらして居る　これを見て始めて善い心持になつた　吉原で清い美しい感じが起つたのはこの時ばかりだ

夜に入って呼吸苦し

芋の湯気団子の露や花芒(すすき)

虫の音(ね)の少くなりし夜寒かな

十三四五六七夜月(やつき)なかりけり

先刻把栗より話あり　その時『日本』文苑の俳句を出

す事を約す　夜一日分だけ送る

　こんなに呼吸の苦しいのが寒気のためとすればこの冬を越すことは甚だ覚束ない　それは致し方もないことだから運命は運命として置いて医者が期限を明言してくれれば善い　もう三ケ月の運命だとか半年はむつかしいだらうとか言ふてもらひたい者ぢや　それがきまると病人は我儘や贅沢が言はれて大に楽になるであらうと思ふ　死ぬるまでにもう一度本膳で御馳走が食ふて見たいなどといふて見たところで今では誰も取りあはないから困つてしまう　もしこれでもう半年の命といふことにで

もなつたら足のだるいときには十分按摩してもらふて食ひたいときには本膳でも何でも望み通りに食はせてもらふて看病人の手もふやして一挙一動悉(ことごと)く傍(そば)より扶(たす)けてもらふて西洋菓子持て来いといふとまだその言葉の反響が消えぬ内西洋菓子が山のやうに目の前に出る　かん詰持て来いといふと言下(げんか)にかん詰の山が出来る　何でも彼でも言ふほどの者が畳の縁(へり)から湧(わ)いて出るといふやうにしてもらふ事が出来るかも知れない

体温を測つて見る　先刻と同じ（卅七度二分）

寒媛計も朝と同じ（六十七度）

九月三十日　晴

朝　ぬく飯三わん　佃煮二種　奈良漬（茄子）
　牛乳五勺　菓子パン　塩せんべい

午　かじきのさしみ　粥三わん　みそ汁実は茄子　なら漬　林檎一ケ半
　便通及ほーたい取替

体温卅七度二分

夕　鰆（さわら）一切（十銭）　小松菜ひたしもの　なら漬（瓜）

粥三わん　葡萄一ふさ

夜　菓子パン

昨夜十二時過やうやう眠る

眠(ねむり)さむ　上野の梟(ふくろう)鳴く　どこやらの飼鶴(かいづる)鳴く　牛乳の車通る　隣の時計四時を打つ

明方僅(わずか)に眠る　睡眠足らず

午後大我(たいが)来る　文苑俳句の事出雲へ旅行の事敏捷(びんしょう)な小き鴫(しぎ)が打てても鈍な大きな雉(きじ)が打てぬ事など語る

寐床を暫(しばら)く坐敷に移して病室を掃除す

今日も息苦し

中田氏新聞社よりの月給（四十円）を携（たずあ）へ来る

明治廿五年十二月入社月給十五円。廿六年一月より二十円　廿七年初（はじめ）新聞『小日本』を起しこれに関することとなりこれより卅円　同年七月『小日本』廃刊『日本』の方へ帰る　同様卅一年初四十円に増す　この時は物価騰貴のため社員総（すべ）て増したるなり

病室前の糸瓜棚　臥してみる所

余書生たりしときは大学を卒業して少くとも五十円の月給を取らんと思へり　その頃は学士とりつきの月給は医学士の外は大方五十円のきまりなりき　その頃の五十円といへば今日の如く物価の高きときの五十円よりは値打多かりしならん　さて余が書生時代の学費はといふに高等中学在学の間は常盤会（ときわかい）の給費毎月七円をもらひ大学在学の間は同給費十円をもらひたり（この頃は下宿料四円位が普通なり）　されど大学へ入学以後は病身なりしため故郷よりも助けてもらひし故一ケ月十三円乃至（ないし）十五円位を費（ついや）したり　しかるに家族を迎へて三人にて二十

円の月給をもらひしときは金の不足するはいふまでもなく故郷へ手紙やりて助力を乞へば自立せよと伯父に叱られさりとて日本新聞社を去りて他の下らぬ奴にお辞誼(じぎ)して多くの金をもらはんの意は毫(ごう)もなく余はあるとき雪のふる夜社よりの帰りがけお成道(なりみち)を歩行(あるき)ながら蝦蟇口(がまぐち)に一銭の残りさへなきことを思ふて泣きたい事もありき　余はこの時まだ五十円の夢さめず縦(よ)し学士たらずとも五十円位は訳もなく得らるるものと思へり　されど新聞社にては非常に余を優遇しあるなり　余はかくて金のために一方(ひとかた)ならず頭を痛めし結果遂(つい)に書生のときに空想

せし如く金は容易に得らるる者に非ず　五十円はおろか一円二円さへこれを得る事容易ならず　否一銭一厘さへおろそかに思ふべきに非ず　こは余のみに非ず一般の人も裏面に立ち入らば随分困窮に陥り居る者少からぬやうなり　五十円など到底われらの職業にては取れる者ならずといふことを了解せり　金に対する余の考はこの頃より全く一変せり　これより以前には人の金はおれの金といふやうな財産平均主義に似た考を持ちたり　従つて金を軽蔑し居りしがこれより以後金に対して非常に恐ろしきやうな感じを起し今まではさほどにあらざりしもこの

後は一、二円の金といへども人に貸せといふに躊躇するに至りたり

三十円になりて後やうやう一家の生計を立て得るに至れり　今は新聞社の四十円とホトトギスの十円とを合せて一ケ月五十円の収入あり　昔の妄想は意外にも事実となりて現れたり　以て満足すべきなり

夕顔の実に富(とみ)を得し話かな（宇治拾遺）

雞頭や糸瓜(へちま)や庵(いお)は貧ならず

夜律(りつ)菓子パン買ひに行く　そのついでに文苑俳句の原稿を郵便に出す

破垣（やれがき）に灯（ひ）見ゆる家の夜寒かな

この月の払ひの内

○一円六十九銭五厘　油、薪（まき）

○六円十五銭　魚（さしみ一皿十五銭乃至（ないし）廿銭）

○三円四十五銭　車及使（内水汲賃一円半）

○三円七十三銭一厘　八百屋

○一円四十八銭五厘　牛乳

○三円　米

○一円五十二銭　醤油、味噌、酢（す）

○一円十一銭　炭
○一円七十八銭　菓子、砂糖、氷（付落沢山あり）
○二円三十銭二厘　現金払飲食費（付落沢山あり）
　鰻、鱒、西洋料理、佃煮、八百屋物等
○六円五十銭　家賃
　計三十二円七十二銭三厘

十月一日　晴

朝　ぬく飯三わん　佃煮　なら漬
便通及ほーたいとりかへ
牛乳五勺ココア入　菓子パン

午　まぐろのさしみ　粥三わん　みそ汁　なら漬　林檎一　ぶだう一ふさ
牛乳五勺ココア入　菓子パン
便通やや堅し

晩　親子丼（どんぶり）（飯の上に鶏肉と卵と海苔（のり）とをかけたり）
焼茄子　なら漬　梨一　苹果（りんご）一

九時眠る
今日は逆上やや強し　水にて額(ひたい)を冷す
母神田へ薬取及買物に往て午後三時頃帰らる

○

朝寒や鼻血おさへし旅の人
松蕈(まつたけ)や思ひ出でたる古人の句
寝処(ねどころ)をかへたる蚊帳の別(わかれ)かな
秀調(しゆうちよう)死せしよし
悪の利く女形なり唐辛子(とうがらし)

病牀

痩骨（やせぼね）をさする朝寒夜寒かな

夜陸翁（くが）来る　支那朝鮮談を聞く　曰く支那の金持は贅沢なり　曰く北京のやうな何の束縛もなき処に住みたし　曰く朝鮮にては白い衣を山の根方の草の上に干すなり　持統天皇の歌の趣あり　日本人は昔朝鮮より来りしかの心地（ここち）せり

十月二日　晴

朝　ぬく飯四わん　はぜ蛤（はまぐり）佃煮　ならづけ

牛乳五勺ココア入　菓子パン　塩せんべい
便通及繃帯とりかへ
午　まぐろのさしみ　粥三わん　煮豆（黒豆とうづら豆）　なら漬　梨二つ
牛乳　菓子パン
夕　鶏肉たたき　卵一　むし飯三わん　煮豆　さしみの残　梨一
一両日来左下横腹（腸骨（ちようこつ）か）のところいつもより痛み強くなりし故ほーたい取替のときちよつと見るに真黒になりて腐り居るやうなり　定めてまた穴のあくことな

らんと思はる　捨ててはてたからだどーならうとも構はぬことなれどもまた穴があくかと思へば余りいい心持はせず　このこと気にかかりながら午飯を食ひしに飯もいつもの如くうまからず　食ひながら時々涙ぐむ

一念(いちねん)来る　話は新聞論と林檎(りんご)論

麓(ふもと)　潮音(ちょうおん)二人来る　話は沼津論修善寺(しゅぜんじ)論（麓のおみやげ鶏肉たたき）

大原伯父より手紙よこさる　中に大原祖父の京滞在中宿元(やどもと)へよこされたる古手紙入れあり

その中に

（略）正岡にも去月十七日安産男子出生之由別而うれしき事に候……八重儀あともけんきに候と相見日あきに参侯よし大仕合に御座候　小児も丈夫に候得共少しちち付候よし　とふぞとふぞ早くなおり候様いのり候事に候……

一正岡うぶきもいかが相成候哉うけたまり度候　帰足之節は唐サラサ位のてんち歟守り袋くらいにてすましたきつもりに御座候　孫の名は何とつき候や

正岡の紋はなにに候や

御序御申越可被下候……（おついでおんもうしこしくださるべくそうろう）

十月八日夜　武右衛門

お重との
佑之丞（ゆうのじょう）殿

（略）子は沢山有之（これあり）ても孫はまたまた別のものと見へ早く見度存（ぞんずる）事に候……

などあり　これは慶応三年のことにてこの手紙に孫とあるは余のことなり　京より帰られしときのおみやげは守袋なりし由

不折（ふせつ）より巴里（パリ）着のはがき来る　下宿処

Grand Hôtel soufflor
I Rue Touldier
P——　F——
右間代(まだい)五十法(フラン)食料百法合計百五十法（七十五円）の
由　日本人同宿九人なりと
夜鼻血出る　水にて額を冷す

十月三日　晴
朝　便通

麦飯三わん　佃煮　なら漬
牛乳五勺ココア入　菓子パン小七個

午　まぐろのさしみ　粥三わん　みそ汁実は玉葱　なら漬　葡萄十八粒　梨一　苹果(りんご)一
牛乳　菓子パン　塩せんべい　渋茶

一日間所見の動物

庭前の追込籠にはカナリヤ六羽（雄四(おす)雌二(めす)）きんばら二羽（雄）きんか鳥二羽（雌雄）ジヤガタラ雀一羽（雌）合せて十一羽　カナリヤ善く鳴く

○黄蝶二つ匆々（そうそう）に飛び去る　○秋の蠅一つ二つ病人をなやます　○蜂か虻（あぶ）か糸瓜棚（へちま）に隠現（いんけん）す　○揚羽（あげは）の蝶糸瓜の花を吸ふ　○鳶（とび）四、五羽上野の森に近く舞ふ　ピーヒヨロリピーヒヨロリ　○蜻蛉（とんぼ）一つ糸瓜棚の上を飛び過ぎ去る　○極めて小き虫やや群れて山吹（やまぶき）の垣根あたりを飛ぶ　○茶褐色の蝶最高き雞頭の上にとまりて動かず　○向家（むかつや）の犬吠（ほ）ゆ　○蜂一つ追込籠の中を飛ぶ

午後は北側の間に寐床を移したる故この所見は中絶せり　また別の日を選んでやるべし

［糸瓜棚の上を飛ぶ蝶の図］

鼠骨来る

午後逆上益はげし　北側の四畳半の間に移る　額を冷し頭を扇ぎただ鼻血の出んことを恐る　目痛く続いて新聞を見る能はず

袢纏の料の足し五十銭といふことにつき論あり

この後は逆上のため筆をとらず　聊追記すれば

四日鳴雪翁ホトトキスよりの十円をとどけられかつホトトキスに付き談する所あり

五日は衰弱を覚えしが午後ふと精神激昂（げっこう）夜に入りて俄（にわか）に烈しく乱叫乱罵するほどに頭いよいよ苦しく狂せんとして狂する能はず独りもがきて益苦む　遂（つい）に陸翁（くが）に来てもらひしに精神やや静まる　陸翁つとめて余を慰めかつ話す　余もつとめて話す　九時頃就寝　しかもうまく眠られず

六日（日曜）朝雨戸をあけしむるよりまた激昂す　叫びもがき泣きいよいよ異状を呈（てい）す　十一時頃虚子四方太碧梧桐来る　これはホトトギスの茶話（さわ）会を開くつもりにてはがき出し置きし者なるが（鳴雪翁よりはことわり来

る）　この始末にて目的ややはづれたり　虚子のみやげ淡路町風月堂の西洋菓子各種、四方太はバナナとレモン、碧梧桐は焼鮒とそら豆なり　今日は御馳走会ではなかりしにいづれもより持参あり　意外の事なり　我内のはまぐろのさしみ、鯵の膾、鯛の吸物なり　内の御馳走も意外のことなり

　こんこと（ママ）で夜まで話してもらう　晩飯は鰻飯なり　その中に鶏飯一つあり　鬮引にて鶏めし四方太にあたる　夕方柳医来る

　皆帰る　眠薬をのみて寐る　けろりかんとして寐ら

れず　翌午前三時を過ぎて僅（わずか）にまどろむ

七日朝睡眠不足のため頭面白からず　碧梧桐来る　曰く虚子来るはずなりしが今朝午前三時過大畑（おおばたけ）の老婦没したるにより来られずと　昼飯をくふて帰る

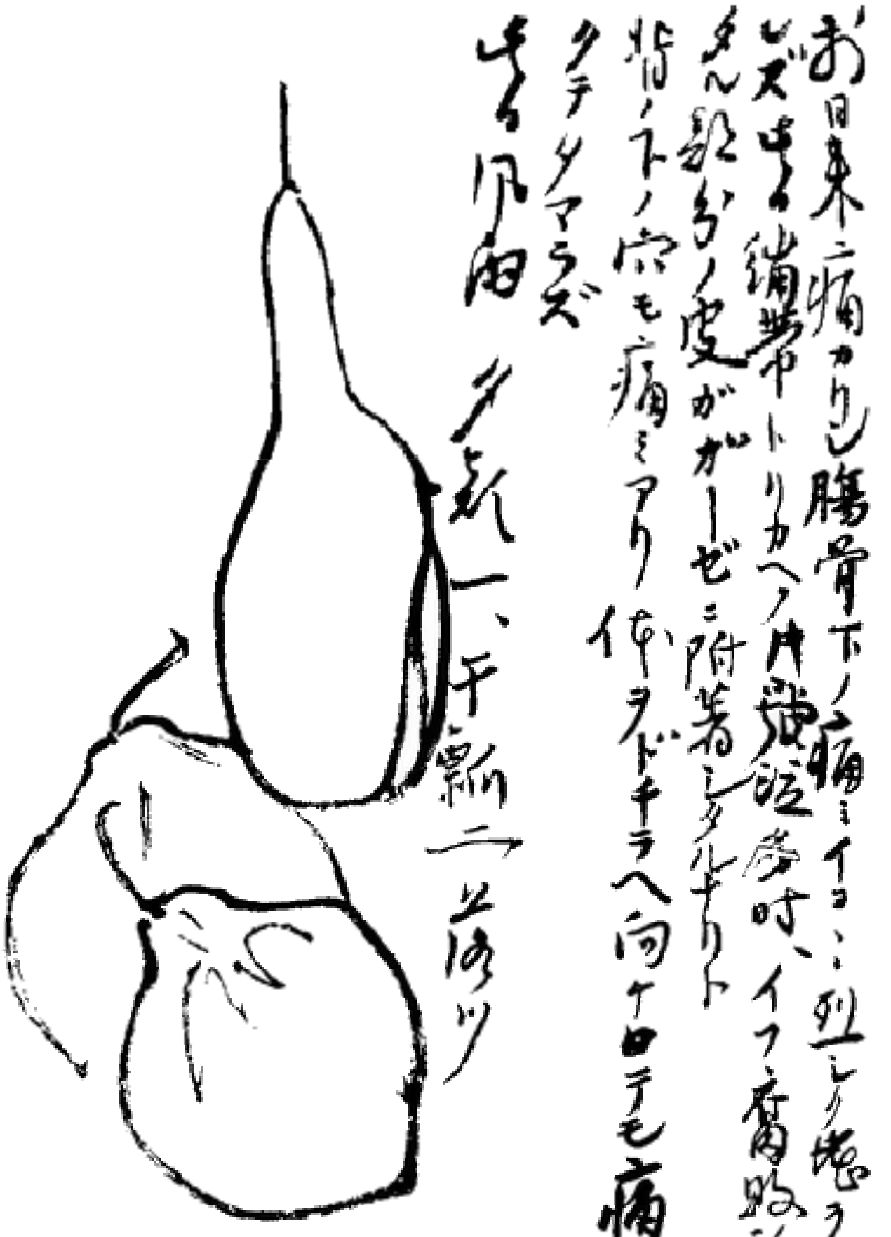
午後麓酣雪亭（ふもとかんせつてい）の支那料理を携へ来る　晩餐を吃して帰る　書籍抵当談あり

この日はのぼせさげの水薬を三回のみ夜は眠薬をのんでよく眠る

前日来痛かりし腸骨下の痛みいよいよ烈しく堪られず　この日繃帯とりかへのとき号泣多時、いふ腐敗したる部分の皮がガーゼに附著したるなりと

背の下の穴も痛みあり　体をどちらへ向けても痛くてたまらず

この日風雨　夕顔一、干瓢二落つ



十月八日　風雨

精神やや静まる　されど食気なし

朝飯遅く食ふ　小豆(あずき)粥二わん　つくだ煮　昨日の支那料理の残り

牛乳　西洋菓子

午飯　さしみ　飯一わん　つくだ煮　焼茄子　梨　ぶだう

牛乳　西洋菓子　しほせんべい

便通とほーたい
晩飯　さしみ三、四切　粥一わん　ふじ豆　梨　ぶだう　レモン
来客なし

十月九日
昨夜服薬せざりしも熟睡　九時過目さむ
朝飯　粥三わん　つくだ煮　梅干
かき三個間食

午飯　飯一椀　さしみすこし　無花果（いちじく）
　牛乳五勺　西洋菓子間食
晩飯　鶏飯（とりめし）半どんぶり
午前鈴木氏柿を携へ来る、はがきを出して秀真（ほつま）氏に来てもらふ、十時過来る、油土（あぶらつち）にて母の顔を作る、三時過虚子来る、夕刻宮本国手（こくしゅ）来る、
　昨夜熟睡のため朝来心地よし　唯（ただ）雨晴れ俄（にわか）に暑を覚えたるためすこし逆上す

（右九日分虚子記）

この日宮本医来診のとき繃帯を除いて新しき口及び背中尻の様子を示す　暫(しばら)くぶりのことなり　医の驚きと話とを余所(よそ)ながら聞いて余も驚く　病勢思ひの外(ほか)に進み居るらし

十月十日　晴　昼来客なし

便通

朝飯　ぬくめし三わん　つくだ煮　梅干

牛乳　菓子パン

午飯　粥三わん　まぐろのさしみ　ふじ豆　柿二
間食　さつまいもを焼きたる　葡萄
夕飯　――エキス一皿　ふきなます　粥一わん　大根
　どぶ漬
体温三十八度七分　夜葡萄をくふ
黒眼鏡をかけて新聞をよむ　雑誌をよむ
午後少しばかり頭を扇がす
余の内へ来る人にて病気の介抱は鼠骨(そこつ)一番上手なり　鼠骨と話し居れば不快のときも遂(つい)にうかされて一つ笑ふやうになること常なり　彼は話上手にて談緒(だんしょ)多き上

に調子の上に一種の滑稽あればつまらぬことも面白く聞かさるること多し　彼の観察は細微にしてかつ記臆力に富めりその上に彼は人の話を受けつぐことも上手なり　頃日(けいじつらい)来逆上のため新聞雑誌も見られずややもすれば精神錯乱せんとする際この鼠骨を欠げるは残念なり　鼠骨は今鉱毒事件のため出張中なり

夜碧梧桐来る　林檎葡萄一籃(ひとかご)をもたらす　余かつて林檎の名を知りたしといへるにより名を聞き来れりと　直(ただち)にりんごの上に名を記し置かしむ

満紅(まんこう)（最もうまき者なりと）　大和錦(やまとにしき)　吾妻錦(あずまにしき)

松井（最大なる者）　岡本　紅しぼり　ほうらん

（黄）

鳴雪翁が先日の茶話会の結果を聞きに来られしことなど碧梧桐話し話頭（わとう）紅緑（こうろく）の上に移る　紅緑はこれまで世上にてとかく善からぬ噂（うわさ）ありたれど俳句における紅緑は全く別人の如く清浄無垢なりしかばわれらもどこまでも清浄無垢の人として相当の敬礼を尽したり　しかるにこの頃紅緑の挙動など人づてに聞く所によれば俗界の紅緑は俳句界の紅緑と混和して世の中に立たんとするが如し　これ紅緑人格の上に一段の進歩なるべきも俳句界の

紅緑は多少の汚濁（おじよく）を被（こうむ）るやも測られず　ここ一大工夫を要す

繃帯をとりかへて眠（ねむり）につく

十月十一日　晴　　体温卅八度七分

便通

朝　ぬく飯四わん　はぜつくだ煮　梅干

牛乳　菓子パン　満紅（りんご）を食ふ

樽柿(たるがき)二つ

十月十二日　昼挿雲(そううん)来る　話なし　瓢亭来る　夕虚(きよ)子(し)来る　雑用(ぞうよう)借用論ほぼ定まる
便通三度

十月十三日　大雨恐ろしく降る　午後晴
今日も飯はうまくない　昼飯も過ぎて午後二時頃天気

は少し直りかける　律は風呂に行くとて出てしまうた　母は黙つて枕元に坐つて居られる　余は俄(にわか)に精神が変になつて来た「さあたまらんたまらん」「どーしやうどーしやう」と苦しがつて少し煩悶を始める　いよいよ例の如くなるか知らんと思ふと益(ますます)乱れ心地になりかけたから「たまらんたまらんどうしやうどうしやう」と連呼すると母は「しかたがない」と静かな言葉、どうしてもたまらんので電話かけうと思ふて見ても電話かける処なし　遂(つい)に四方太にあてて電信を出す事とした　母は次の間から頼信紙(らいしんし)を持つて来られ硯箱(すずりばこ)もよせられ

た　直(すぐ)に「キテクレネギシ」と書いて渡すと母はそれを畳んでおいて羽織を着られた「風呂に行くのを見合せたらよかつた」といひながら銭を出して来て「車屋に頼んでこう」といはれたから「なに同し事だ　向(むこ)へまで往つておいでなさい五十歩百歩だ」といふた心の中はわれながら少し恐ろしかつた「それでも車屋の方が近いから早いだろ」といはれたから「それでも車屋ぢや分らんと困るから」と半ば無意識にいふた余の言葉を聞き棄てにして出て行かれた　さあ静かになつた　この家には余一人となつたのである　余は左向に寐たまま前の硯箱を見る

と四、五本の禿筆（ちびふで）一本の験温器の外に二寸ばかりの鈍い小刀（こがたな）と二寸ばかりの千枚通しの錐（きり）とはしかも筆の上にあらはれて居る　さなくとも時々起らうとする自殺熱はむらむらと起つて来た　実は電信文を書くときにはやちらとしてゐたのだ　しかしこの鈍刀や錐ではまさかに死ねぬ　次の間へ行けば剃刀（かみそり）があることは分つて居る　その剃刀さへあれば咽喉（のど）を掻（か）く位はわけはないが悲しいことには今は匍匐（はらば）ふことも出来ぬ　已（や）むなくんばこの小刀でものど笛を切断出来ぬことはあるまい　錐で心臓に穴をあけても死ぬるに違ひないが長く苦しんでは困るから

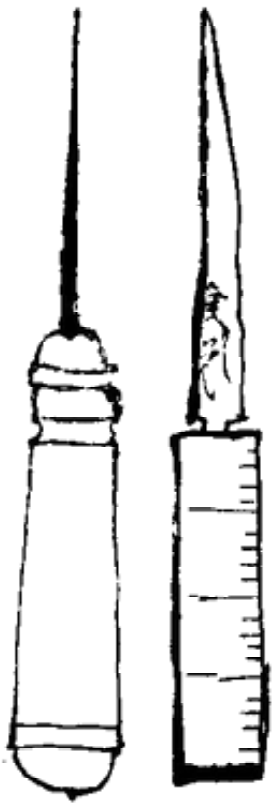
穴を三つか四つかあけたら直(すぐ)に死ぬるであらうかと色々に考へて見るが実は恐ろしさが勝つのでそれと決心することも出来ぬ　死は恐ろしくはないのであるが　苦(くるしみ)が恐ろしいのだ　病苦でさへ堪へきれぬにこの上死にそこなふてはと思ふのが恐ろしい　そればかりでない　やはり刃物を見ると底の方から恐ろしさが湧いて出るやうな心持もする　今日もこの小刀を見たときにむらむらとして恐ろしくなつたからじつと見てゐるとともかくもこの小刀を手に持つて見ようとまで思ふた　よつぽと手で取らうとしたがいやいやここだと思ふてじつとこらえた心の

中は取らうと取るまいとの二つが戦つて居る　考へて居る内にしやくりあげて泣き出した　その内母は帰つて来られた　大変早かつたのは車屋まで往かれたきりなのであらう

　逆上するから目があけられぬ　目があけられぬから新聞が読めぬ　新聞が読めぬからただ考へる　ただ考へるから死の近きを知る　死の近きを知るからそれまでに楽(たのし)みをして見たくなる　楽みをして見たくなるから突飛な御馳走も食ふて見たくなる　突飛な御馳走も食ふて見たくなるから雑用(ぞうよう)がほしくなる　雑用がほしくなるか

ら書物でも売らうかといふことになる……いやいや書物は売りたくない　さうなると困る　困るといよいよ逆上する

古白日來



「千松島」松宇文中

ヨリ扱

移竹ノ秋ノ句

日本文学電子図書館

仰臥漫録

著　者：正岡子規
制作者：宮澤一郎
出版社：岩波文庫、岩波書店
2005年5月24日 第50刷発行

日本電子文学図書館